
DOG Days **もう一人の来訪者**

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOG Days もう一人の来訪者

【Nコード】

N6379S

【作者名】

六甲水

【あらすじ】

フロニヤルドに勇者として召喚されたシンク。だが、彼の前に召喚された少年がいた。少年は勇者として戦いに協力するのではなく、傭兵として二つの国をめぐることに……………

4月に始まったアニメDOG Daysの小説です。多分主人公はチートかも

第一話 初めて出会ったのが、犬耳の女の子。(前書き)

六甲水「というわけで、始めりましたDOGDaysの小説」

真夜「というか、書いてない奴溜まりまくってるんじゃないのか？」

六甲水「とりあえず、あげるところと違って、今回はプロローグだけだから」

第一話 初めて出会ったのが、犬耳の女の子。

シンクが召喚される三週間前……

一人の少年、綺羅木真夜は家の庭で木刀を振っていた。真夜は中学校の剣道部のエースでもあり、これから始まる大会のために鍛えていた。

（大会まで、まだ日があるけど……鍛えておくことに越したことはないよな。）

真夜はそう思いながら木刀で素振りをしていると、突然自分が立っている場所にピンク色の絵が浮かび上がった。

「へっ？」

真夜は咄嗟に逃げようとしたが間に合わず、その絵に吸い込まれてしまったのだった。

「あ……の、だ……じょうぶ……すか？」

（誰だ？俺の体を揺すってるのは……）

真夜は誰かに揺すられているのに気がついた。目を開けると目の前にピンク色の髪の女の子がいた。

(女の子?まさか家で倒れていたのを通りすがりの人に発見されて………ん?)

真夜はあることに気がついた。それは………女の子の頭に何故か犬の耳があった。さらには………何かしっぽが揺れているような………

(………なるほど)

「あの、大丈夫ですか?」

真夜は起き上がると、女の子を見た。ピンクと白のドレスを着て、顔立ちも何かかなりいい。だけど、何故か犬耳としっぽが付いている。

「………あゝ、悪い。これは夢だわ。寝直そう。」

「え、ちょ、いきなり寝ようとしなくてください」

とりあえず、現実と信じたくなかった真夜はもう一度寝直すことにしたのだった。

第一話 初めて出会ったのが、犬耳の女の子。(後書き)

六甲水「いきなりだね。」

真夜「そうだな。何で召喚されたとかやるのか?」

六甲水「一応ね。武器も決まってるから」

第二話 目覚めたらそこは豪華な部屋でした。(前書き)

六甲水「第二話ですね。」

真夜「そうだな。というか、ヒロイン決まっているのか」

六甲水「……………さあて、始めようか」

真夜「まだ決めてないのかよ」

第二話 目覚めたらそこは豪華な部屋でした。

目覚めるとそこは豪華な部屋のベッドで寝ていた。

「ここは……………どこだ？」

とりあえず、今までの出来事を思い出してみた。俺は確か家の庭で素振りをしてたんだっけ。そしたらいきなり変な絵が現れてその中に吸い込まれて……………気がついたら、犬耳の女の子が……………

「……………犬耳って、俺はやっぱり夢でも見てたのか。そうだ、俺はきつと家の庭で倒れていたのを誰かに助けられて……………今はその助けしてくれた人の家にいるんだ。そうだ、きつとそうなんだ」

とりあえず、自分で自分を納得させようと思っていたのだったが……………突然部屋のドアからノックが聞こえ、扉からさつき会ったピンク髪の犬耳っ娘とローブを纏った栗色の髪の犬耳っ娘がやってきた。

「お目覚めになられたんですね。」

「良かったです。」

二人は心配そうにしていたけど……………やっぱり犬耳っついてるし、しつぽまであるし……………

「まあ、起きたのは起きたけど……………ここはどこなんですか？何か俺、いきなり変な絵に吸い込まれて……………」

俺がそう言つと、ローブの娘が冷や汗をかいていた。するとピンク

髪の娘が苦笑いをしながら答えた。

「ここはフロニヤルドのビスコッティ共和国です。実は貴方がここに来てしまった原因なんですが……………」

「姫様。ここから私が……………」

姫様って……………一体？とりあえずあんまり気にしないようにしよう。姫様と呼ばれる女の子の代わりにローブの娘が原因を話してくれた。

「実は、新しい通信手段を思いついたので、その起動実験の最中に、装置が暴走してしまつて……………」

とりあえず、簡潔に考えると、何らかの装置の起動中に装置が暴走。その結果、俺は二人の前に落ちてきたと……………どこの漫画だよ。

「事情は大体わかつたけど、戻れるのか？」

「すみません。貴方を元の世界に戻せられるかが分からなくなつて……………」

「現在調べ中か。まあ、そんなに急ぐこと無いし……………のんびり待つよ。」

俺がそう言うと、ローブの娘は笑顔になった。ついでにローブで隠れてて見えないがしっぽがすごい勢いで揺れている気が……………

「とりあえず自己紹介がまだだった。俺は綺羅木真夜。」

「私は、ミルヒオーレ・F・ビスコッティ。この国を治めるもので

す。周りから姫様って呼ばれていますけど、よければミルヒと呼んでください」

「私はリコッタ・エルマールです。ビスコッティ国立研究学院の主席研究士であります。」

俺達はお互いに自己紹介を終えると、ミルヒ姫がお城を案内してくれるのだった。

第二話 目覚めたらそこは豪華な部屋でした。(後書き)

六甲水「うーん、マジでヒロインでしょう」

真夜「早く決めろよ。普通にミルヒでいいんじゃないのか？」

六甲水「いや、ミルヒはシンクとくつつかせるから……………」

真夜「そこは決まってるのに……………」

六甲水「とりあえず、次回はお城の案内と戦いが始まるかも……………」

第三話 お城案内されているはずなのに、何でいきなりバトル展開？（前書き）

六甲水「第三話です。」

真夜「というか、他の作品上げるよ。」

六甲水「こっちが進んだら、一気に上げる予定だよ。」

第三話 お城案内されているはずなのに、何でいきなりバトル展開？

俺はミルと姫とリコッタの二人にお城の中を案内されていた。

「それにしても、本当にお城なんだな」

「？それはそうですよ。シンヤさんはここをどこだと思っていたんですか？」

「いや、普通にお城だって思ってたけど、そういう意味じゃなくって、俺の世界ではこう言った城とか残されてなくなってるな。あんまり見たことがないんだよ」

「へえ、そうなんですか。今度、ぜひシンヤ様の世界のお話を聞かせてください。」

「別にいいけど、その『様』はやめてくれ。ちょっとくすぐったいから」

あんまり、『様』って呼ばれたことがないからな。あるとしたら、お客様ぐらいだけど……

俺がそういうとリコッタはしばらく考えこみ、こう言った。

「では、姫様と同じようにシンヤさんでいいですか？」

「うん、そっちのほうがいいな。」

こうして、俺たち三人は楽しそうに話しながら歩いていると、訓練場らしき場所にたどり着いた。

普通訓練場っていうと、剣の素振りや何か木で出来た人形とかがありそうな感じだが………何故かそうだったものがなく、あるのはアスレチックのようなものだった。

「何だ？あれは？」

「あれは今度の戦のためにリコッタが作った訓練機です。」

とミルヒが言ったが………戦のためにあんなアスレチックが必要なのか？いわゆるトラップみたいなものなのか？やはり謎が深まるばかりだ。

「おや、これは姫様にリコッタ。このような場所で何を？」

考え込んでいると、茶髪の男がやってきた。やっぱり犬耳があるんだ。

「今、シンヤさんを案内しているんですよ。」

「ほう、君が事故に巻き込まれた者か。私はロラン・マルチノッジ。ビスコッティ騎士団の騎士団長だ。」

「綺羅木真夜です。よろしくおねがいします。団長。」

「ロランでいいのだが、」

「すみません。あまり名前で呼んだりすることがなくて、しばらくはそういった風に呼んでしまつかも」

「ははは、面白いな君は」

最初は団長って聞いて、怖い人だなと思ったけど、意外と気さくな人だな。そんな事を思っていると、突然視線を感じた。振り向くと緑色の髪の子がこっちを見ていた。俺は近づいて声を掛けた。

「どうも、」

「……ふん。」

挨拶したのに、そっぽを向かれてしまったのだが……すると、団長がある提案をいきなりしてきた。

「そうだ。シンヤ。少し模擬戦でもしないか？何となくだが、君には剣の素質があるような気がするんだ。」

「まあ、元の世界で剣道やってましたから……もしかして、団長と？」

「いや、エクレールとだ。いいな、エクレール」

「はい、」

さっきの女の子だ。うーん、女の子と戦うのは少し気がひけるけど、剣の修業になるし丁度いいかも……でも、俺、今木刀持ってないんだけど、

「はい、シンヤさん」

とリコッタが木刀を渡してきた。柄を見ると俺の名前が刻まれている。俺の木刀だ。

「もしかして、リコッタが持っていてくれたのか？」

「はい、きっと大切なモノだと思ったので、預っていたのであります。」

「そうか、ありがとうな。」

俺はお礼を言いながら、リコッタの頭を撫でた。リコッタは少し嬉しそうにしていた。

俺達は一旦、外に出て、模擬戦の準備をした。さすがに模擬戦なのでエクレーも真剣ではなく、木刀を使ってくれるみたいだ。

「では、模擬戦を始める。まずはルールだ。相手をギブアップさせるか。相手の動きを封じるか。武器を破壊するかだ。ちなみにフロニヤカなども禁止だ。では、シnya対エクレーの模擬戦を始める」

こうして、何故か成り行きで模擬戦をするハメに、あんまり傷つけずに終わらせよう。

第三話 お城案内されているはずなのに、何でいきなりバトル展開？（後書き）

六甲水「というわけで、真夜のヒロインはリコッタに決定です。」

真夜「いきなりだな。」

リコッタ「そうでありますよ。理由は何何ですか？」

六甲水「いや、書いてて、意外といい相性かもって思って……………」

真夜「そんな理由か」

第四話 まさかお風呂でこんな目に……………（前書き）

六甲水「というわけで、真夜vsエクレールです。」

エクレール「というか、やる意味あるの?」

真夜「確かに、」

六甲水「ここはやっぱりやってみたいからだよ。」

真夜&エクレール（この作者は……………）

第四話 まさかお風呂でこんな目に……

何故かなりゆきで、模擬戦をやるはめになってしまった俺だが……

「普通に、団長とかと戦いたかったんだけど、」

俺がそう呟くと、エクレールと呼ばれる少女が少し怒った顔をしていた。

「何だ？私じゃ不満なのか？」

「いや、そういうわけじゃないんだけどさ、あんまり女の子と戦いたくないというか、勝っちゃったら何か可哀想だから……」

「ほう、私があんたに負けるって……言うの……！」

突然、エクレールが仕掛けてきた。俺は二本の刃を木刀で防ぎ弾いた。

「む、やるな」

「突然、襲い掛からないでください。びっくりするので、ハア……！」

俺は木刀を縦に振った。エクレールは後ろに下がったが、俺はその隙を付き、エクレールの右肩に蹴りを喰らした。

「な、」

二人の戦いをミルヒオーレとリコッタとロランが見守っていた。

「ほう、シンヤはかなりやるな」

ロランが真夜の戦闘スキルを見ていった。

「確かに、シンヤさん、剣術と格闘術を上手く混ぜていますね。」

「わあ、凄いです。」

（確かに、あのエクレールを相手にあそこまでやるなんて………彼は一体何者なんだ？）

ロランがそんな事を考えていると、戦いの状況が変わった。真夜がエクレールのお腹に蹴りを当てたのだ。

「がはっ、やばい、やられる。」

エクレールがそう思い、目を瞑った。だが、何時まで経っても攻撃が来ない。エクレールが目を開けると真夜が心配そうに声をかけていた。

「おい、大丈夫か？ つい、やっちゃったけど、怪我は？ お腹あたりとか大丈夫か？」

「な、な、何で止めを刺さない。」

「いや、そういう問題じゃないだろ。本当に悪かった。本気で蹴りいれて……………」

俺は必死に謝るが、エクレールは頬ふくらませていた。やっぱり怒っているのかな？

「これは、戦いだ。何故そうやって心配など……………」

「いや、俺的にはあんまり女の子を傷つけないから……………今回は俺の負けでいいや。団長そういう事で、」

「うむ、そうだな。とりあえず、エクレール。お前は医務室に行け。」

「は、はい、お兄様」

こうして、エクレールとの試合が終わったのだが……………やっぱり少し手を抜いてあげればよかったかも……………

試合の後、俺は団長やミルヒ姫の勧めもあり、お風呂に入ること

……

「それにしても、本当にお城なんだよな。というか、団長に風呂場聞けばよかったかも」

お風呂に入れるのは嬉しいが、広すぎてお風呂場がどこにあるのかが分からない。俺はしばらく迷走し、ようやく風呂場にたどり着いた。何か看板が立ってるけど、まあ気にしなくていいか。

『只今、女性入浴中』

俺は脱衣所で服を脱ぎ、お風呂場に入ると………からだを洗うリコッタがいた。

「ほえ？シンヤさん？どうしてこんな所に……………」

「……………何でリコッタがいるんですかね？」

しばらく沈黙が続いた。そして……………リコッタが無垢な笑顔で言った。

「今、女性の入浴時間ですよ？男性は一時間前に終わったであります……………」

「……………ごめん、迷子になってて、まさか、今女性の時間かよ。」

「まあ、そういうこともありますから……………」

俺は全力で脱衣所に戻り、急いでその場を離れるのだった。何かリコッタが何か言いかけてたけど……………明らかに『折角ですから、一緒に入りましょうであります。』って聞こえたぞ。頼むから恥らいを持ってください。

こうして、俺の異世界での一日目は終わるのだった。だが、それから何日か経って、まさかあんな事になるとは……………

第四話 まさかお風呂でこんな目に……………（後書き）

六甲水「次回は真夜の武器が登場です。」

リコッタ「どうして、シンヤさんは一緒に入らないのではありませんか？」

真夜「いや、それは……………色々とまずいからだ。」

リコッタ「まずいって何がですか？」

真夜「作者、助ける」

第五話 犬耳の次は猫耳ですか（前書き）

六甲水「ついに、レオンミシエリの登場です。」

真夜「というか、いつになったらシンクが登場するんだ？」

六甲水「まだ登場はしないかも、君にはちょっとリコッタとね」

真夜「なにをヤル気だよ」

第五話 犬耳の次は猫耳ですか

この世界に来てから一週間が経とうとしていた。俺とミルと姫とリコッタとエクレールと一緒にお茶を飲んでいたときのことだった。

「謎の剣？」

俺達のところに来た団長がその話をした。

「ああ、近くの森の奥深くに不思議な剣があるという話を聞いたのだが、少しばかり気になるのだが……シンヤ、行って取ってきてくれないか？」

「いや、何で俺が……普通にエクレーや団長でもいいんじゃないのか？」

「ふむ、私は手を離せないのだ。そこで暇………退屈そうにしている君の出番ということだ。」

今、暇そうにしているとか言いそうになったよなこの団長さん。まあでも、毎日お城の中にいるというのも飽きるし、いいかも………

「分かりましたよ。でも、俺一人で行くんですか？さすがにまだここら辺の土地勘ないし………」

「ふむ、その任務は君とエクレールとリコッタに行ってもらおうと」

「分かりました。お兄様」

「私も、手伝えることがあれば手伝うであります。」

エクレールとリコッタはすんなり了承してくれた。だけど……

「ミルヒ姫。貴方は駄目ですよ。」

「ふえ、どうして私が行きたがってるって分かったんですか？」

いや、明らかにきたそうな顔をしてたよ。ミルヒ姫。

「いや、普通に考えて危険ですからね。ほら、団長も心配しますから……。」

「ふむ、まあ、エクレールとシンヤがいれば姫様の警護も安心だろう。シンヤ、姫様も一緒に……。」

あれ？この国は姫様に甘すぎるぞ。大丈夫なのか……

俺たち四人は近くの森を歩いていた。何故か姫様だけ鳥みたいなものに乗っていた。

「姫様、お気をつけください。ここら辺は蛇とか出るので」

「はい、分かりました。エクレール」

「警護頑張ってくださいであります。エクレ、シンヤさん」

姫様の後ろにリコッタも乗ってるし……………歩いてるのは俺とエクレだけだし……………

「はあ、というか俺はいつになったら帰れるんだよ。」

俺がふっと思つたことを口に出した。あれから一週間が経つが一向に元の世界に帰れる手段がわからないでいた。

「すみません。シンヤさん。私必死に探しててありますが……………」

リコッタが泣きそうな顔をしていた。結構必死に探してくれているみたいけど……………

「いや、そんなに早く帰りたいとは思ってないし……………それに剣を鍛えられるから別に困ってないから……………」

ここ一週間はエクレと一緒に訓練に参加したりしている。最初戦っ

てから何度も戦ってるが俺が全戦全勝である。

「ふん、剣の腕が立つからとはいえ、これから起こる戦には生き残れるのか？」

「戦？ああ、アレのことか」

俺はこの世界の戦について、ミルヒ姫やリコッタから話を聞いている。何とか平和な戦というのが第一印象だった。多分俺も参加することになるんだが……

「確かに、木刀だけじゃ戦えそうにないよな。」

「そういえば、お前は一刀流なのか？」

「ん、何で？」

「いや、試合でいつも竹刀を持つ手を持ち替えたりしているから……どうなんだ？」

「ああ、実は二刀流だったりとかか。正解。本来は二刀流だけど、試合とかだと一刀流にしてるんだよ。まあ、一刀流でも不便じゃないし……」

その時だった。突然黒い斧がこちらに向かって来た。俺はリコッタを、エクレールはミルヒ姫に抱きつき、攻撃を交わし、今度は鎖が付いた鉄球が襲ってきた。俺は木刀で鉄球を弾こうとしたが、折れる可能性があったので、鎖を木刀で絡ませた。

「何だ？原住民でも住んでるのか？」

「いや、違う。コノ武器は……まさか……」

「ほう、私たちの攻撃を避けるとは………さすがは親衛隊隊長だな。」

「閣下、俺の攻撃を受け切ったガキもすごいんですね」

そこに現れたのは、銀髪に鎧を身につけた女の子と、茶髪のおっさんだった。明らかに気になるのが………猫耳だった。

「犬の次は猫ですか。その次辺りうさ耳とかきそうだな。」

「貴様、ワシを馬鹿にしておるのか？ワシはレオン・ミシエリ・ガレット・デ・ロワ。ガレット獅子団領を納めるものじゃ。閣下と呼べ」

何かこの世界の人は面白い人が多いな。本当に

第五話 犬耳の次は猫耳ですか（後書き）

六甲水「というわけで閣下の登場です。」

レオ「うむ、ようやくじゃ、」

真夜「てか、どういった理由で俺はガレットに行くんだ？」

六甲水「それは次回のお楽しみです」

第六話 一本の剣だけど二本の剣でもある（前書き）

六甲水「今回で真夜の武器が登場です。」

真夜「それで、原作の話に行くのか？」

六甲水「次回辺りね。」

第六話 一本の剣だけど二本の剣でもある

突然襲ってきたのは、今ビスコッティ共和国と戦中のガレット獅子団領の閣下とその付き人みたいな人だった。エクレールとリコッタの二人はかなり警戒してるけど、ミルヒ姫はそうでもなかった。

「お久しぶりですね。レオ姫様。まさかこのような場所で……………」

「黙れ、犬姫。我らは敵同士。慣れ合うつもりはない。それに姫ではなく閣下と呼べ」

うーん、何というかこの二人仲が悪いのか？いや、でも、ミルヒ姫はそんな風に見えないし……………」

そんなことを考えていると付き人のおっさんが俺に話しかけてきた。

「お前、見ない顔だな。俺の攻撃を一瞬で見切り、さらに今の武器でどう対処するかも一瞬で判断できる。本当に何者だ？」

「ん、えっと、とりあえず一般人でありたい一般人かな？おっさんは？」

「おっさん！？ふははは、本当に面白い男だ。俺はガレットの將軍、ゴドウィン・ドリユールだ。」

何かごついおっさんだけど、結構話しやすい人かも。とりあえずこの二人が何でこんな所にいるのか聞いてみるか。

「おっさんたちは何でここに来たんだ？」

「ん、ああ、この森に不思議な剣があると聞いてな。その調査を閣下と一緒にな。どうやらお前達もそうみたいだな。」

「まあね。剣がどこら辺にあるのか分かるのか？」

「ああ、まっすぐ進めばあるらしいが、途中でお前らを見つけて、閣下が近づけさせないように……」

とりあえず、情報を整理するとガレットの方もその剣を探しに来て、そんな時に俺らと出会したということが。それにしても……

「おっさん、あんた苦労してるんだな。」

「何だ？いきなり」

「いや、あの閣下と一緒にいて疲れませんか？」

「ははは、そんな事はないぞ。だが、その口ぶりだとお前の方は苦労しているみたいだな。」

「ええ、ミルヒ姫は天然だし、リコッタも恥らないし……… ……何か色々と気を使って………」

「頑張れ、シンヤ。」

俺とおっさんもといゴドウィンがそんな事を話していると、突然頭に痛みが走った。見るとエクレールが俺の頭を、閣下がおっさんの頭を殴っていた。

「何意気投合しているんだ(のじゃ)」「

「いた、エクレ。ただの世間話だぞ。それぐらい見逃せよ」

「見逃せるか！！姫様の悪口も言っていたしな」

「いや、それは……………」

俺がエクレにお説教を喰らっていると、閣下が突然走りだした。その後をゴドウインも付いていく。

「ふん、このような場所で道草を食っている場合ではなかったな。今のうちに剣を取るぞ」

「しまった。シンヤ私たちも行くぞ」

「いや、ミルヒ姫の警護は？」

「なら、シンヤ。お前が先に行け。私は後から追いつく。」

俺はエクレに言われるがままに、閣下達の後を追うのだった。

しばらく走っていると、何か祠みたいなものが見えてきた。祠の中
にうつすらと白と紫の光が見えた気がした。

(何か光ってる？それに……………あの二人は……………)

俺は一度立ち止まり、辺りを見渡したが闇下とおっさんの姿が見え
ない。すると、突然後ろから斧が降ってきた。

「待ち伏せかよ。くそ。」

俺は斧を木刀で弾こうとしたが、勢いがありすぎて弾くことが出来
ず、木刀が折られた。

「ほう、やるな。」

木の上を見ると闇下とおっさんがいた。やっぱり待ち伏せか。

「お気に入りだったのにな。この木刀。ちゃんと弁償ぐらいはして
くださいよ。闇下」

「ふん、ワシを倒せたらな。ゴドウィン。手を出すな」

「了解。闇下」

閣下はおっさんに命令を与え、木の上から降りてきた。そして、斧を拾い上げ、俺に向けた。

(さて、どうする？あつちには武器があるけど、俺は武器なしか。まあ、あると言っちゃあるけど……この折られた木刀でどこまで出来るか。あんまり部の悪い賭けはしたくないけど……やるしかないよな)

俺は後ろを向き、祠の方に走っていった。

「敵を前にして逃げるとは……いや、違う。まさか……」

俺の一か八かの賭け。それは祠に眠るあの剣だ。あれを手にいれれば……あとは多分何とか成るはずだ。

「やらせるか。」

閣下は再び斧を投げつけてきた。俺は全力で走り、その攻撃を何とか避ける。そして祠にたどり着いた。祠には変わった剣が刺さっていた。刃が半分が紫、もう半分は白く輝き、俺はその剣に触れた瞬間、何だか力が沸き上がってきた。

「これは……」

そして、頭の中にこの剣の名前が出てきた。

レオは剣に触れている真夜を見ていた。

「あの小僧。さっきから動かないがどうしたんだ？」

レオはゴドウィンに話を振る。ゴドウィンは見たままの感想を述べた。

「アイツ、何だか剣に魅了されている感じがしますが……………」

「確かに……………そこまで危ない剣なのか？なら急いで破壊を……………」

二人がそんな話を話していると後ろからミルヒ達が追いついた。

「やっと追いつきましたね。」

「そうですね。姫様」

「シンヤの奴どうかしたのか？」

エクレールが真夜に近づこうと歩き出した。ミルヒ達もセルクルに乗ったままその後を付いて行こうとしたその時だった。突然ミルヒとリコッタの後ろに巨大な土の腕が伸び、ミルヒ達に襲いかかろうとしていた。

「しまった。姫様。」

「まさか、この剣を護るモノか！！犬姫」

「ちっ、間に合いませんぜ。閣下」

この場にいた全員がミルヒ達がもうダメだと思っていた。ただ一人を覗いて…………

「剣の名前…………ビスコッティとガレットの二つの国で作られた剣。一本であり二本でもある剣。『デュアルブレード・白姫と紫姫』」

真夜は剣を抜き、剣を二つに分け、白い剣・白姫を土の腕に突き刺した。

「シンヤ。お前、その剣は」

エクレールが驚く中、真夜は紫の剣・紫姫で土の腕を切り裂き、二人を助けたのだった。

何とか事無きを得たミルヒ姫だったが……俺は凄く疲れを感じていた。

「何かどつと疲れたんだけど、」

「大丈夫でありますか？シンヤさん」

「な、何とかね」

リコッタが心配そうにしていたので、俺はあまり心配をかせげないように笑顔で言うが……かなり疲れた。

「輝力を使ったからじゃないのか？」

エクレールも心配そうにしながら言ってきた。

「輝力って何？ていうか……もう眠く……」

俺はそのまま眠りについてしまった。だが、眠りに付く瞬間、ミルヒ姫と閣下が何かしゃべっていたような……

『では、今度の戦の時に』

『ああ、その時に「やつを返そう。」』

（何だ？戦でも始まるのか？）

俺の意識はそのまま無くなっていったのだった。

第六話 一本の剣だけど二本の剣でもある（後書き）

六甲水「かなり長めでスミマセン。」

真夜「何か俺寝ちまつたけど……」

六甲水「まあ、剣とその眠気については次回あたりで、ついに真夜がガレットに行きます。行けたら戦も始められれば……」

真夜「やっとシンクの登場か」

第七話 目覚めたら、戦中

何だか騒がしかった。最初は、ミルと姫やリコッタが騒いでるのかと思っていたのだが、

(それにしたって、五月蠅いだろ。)

何だか、うおおおおとか聞こえるし、とりあえず起きてみると、そこは城の自室ではなく、何処かのテントだった。

「あれ？、お城じゃない。」

寝る前の記憶を遡って見ると、確か森で寝てしまったんだ。とりあえず、一旦外に出てみる事にした。

外は何だか戦中のような感じだった。

「俺、どのくらい寝てたんだろ？」

そんなこと考えていると、前から知っている顔が歩いてきた。閣下だ

「やっと起きたか。」

そう言いながら、白姫と紫姫を投げ渡した。

「閣下、俺どれくらい寝てたんですか？」

「最初に聞くのがそれが、状況は分かっているのか？」

「まあ、あの時寝ちゃって、多分閣下がいるこの場所があそこから近かったからですか？」

「そうだな。やはりお前変わっているな。因みにお前は二週間寝ていたのだ」

やっぱりと思った。まさか森に行った次の日に戦は流石に無いだろうと思う。

「閣下、ありがとうございます。それで俺は今あっちに帰れるのですか？」

「ふむ、今は戦中だからな。帰すのは手間がかかるから、ワシが送り届ける。」

まさか・・・戦場を駆け抜け抜けるとか無いですね。閣下

案の定、閣下のセルクルに乗って戦場を駆け抜ける事になった。なんとこの事を……

だが、テントからではなく戦場の中間辺りかららしい。閣下は勇者が来たから、試してみるとか言ってたけど、

「てか、吊橋辺りで、待つてろって、こっちは徒歩なのに……」

ため息をつきながら、歩いている俺だった。

「さっきからナレーターも盛り上がってるな。」

ナレーターが閣下の登場に熱く語っているなか、俺はリコッタの事を考えていた。

「あいつちゃんと調べてくれてるかな？」

何と無くリコッタの事を考えていると、ビスコッティ兵を発見した。

「見つかったても問題ないからいいけど、閣下と落ち合いたいから、保護されずに行くか。」

俺はコートの中に何故か入っていた布を顔に巻いた。

(そういえば、コレ、剣道の……)

とりあえず、顔を見られないように、変装して吊橋に向かうのだった。

一方閣下は………
先に吊橋に来ていた。

「シンヤめ、遅いではないか。」

さっき勇者とエクレを退けた。閣下だったが、真夜を心配していた。

「これなら、一緒に行けばよかったな。」

と心配していると、真夜が走ってやってきた。

「お待たせしました。閣下」

「遅いぞ。何をやっていた。」

「ちよつと道草を」

「まあ、いい。早く乗れ」

俺は閣下に言われセルクルに乗ったのだった

吊橋エリアの難関スベスベエリアを駆け抜けようとしていると、俺はあることに気がついた。

「閣下、上から来ます。」

「分かっている。」

上を見ると、エクレと金髪の少年がいた

「「させるかああああああ」」

二人は同時に攻撃しようとしていた。閣下は俺の服を掴んだ

「あの、閣下、何を……………」

「喜べ、シンヤ。 出番だ。」

そう言って閣下は俺を思い切り、二人に目掛け投げた。

「何か酷いぞ閣下、」

「なっ、シンヤ。」

俺は思い切り出され、二人激突し、下に落ちたのだった。

「何か酷い目に合ったな。」

少しばかり気絶していたためか戦場が火の海に変わっていた。閣下は紋章術を発動させていた。

「ヤバッ、」

俺は咄嗟に逃げようとしたが、頭の中に白姫の使い方が浮かんだ。

「何だ？白いオーラ？ホワイトヴェール？」

俺はイメージ通りに、白姫を地面に刺し、白いオーラを出した。

「大爆破！！」

閣下の叫びと同時にエリア全体が火の海に包まれた。

『爆破あああああ！獅子王炎陣大爆破！範囲内にいるかぎり立っていられる者はいない。だが、私達はとんでもないものを目の当たりにしているぞ！！たった一人たった一人、閣下の攻撃を防いだ人がいます。』

「何？」

閣下が俺の方を向くと俺は白いオーラに包まれて無傷でいた。というか、閣下なんで睨んでるの？

「シンヤ、何でお前は無傷なんだ？」

「いや……………何というか、気合ででしょうか？」

「ほう、では、その地面に突き刺している剣の力はどうなんだ？」

「さあ、まだ遣い方分からないんですが……………とりあえず、閣下。あの二人が来てますよ」

俺は上を指差すとエクレと勇者がいた。

「そう簡単に……………やられるかあああああああああ——
——」

「にしても高すぎない？ねえこれ高すぎない？」

二人の姿を見つけた閣下は迎撃体制に入った。だが、エクレは体勢を整え、思いつきり勇者を蹴った。

「さすがはエクレだな。丸見えでもこっちにやってくるとは……………」
俺は一瞬見えた縞パンを見てしまい、少し罪悪感を覚えていたのだ。
った。

勇者はこっちに向かってきた。でも閣下は紋章術を消し、斧で迎撃をしようとした。

（手加減かな？）

勇者と閣下の武器がぶつかり合った。俺はとりあえず、離れた場所で様子を見ることにしたが……………やっぱり、閣下が圧倒的だな。だが、エクレが閣下の後ろに着地し、閣下に向かっていった。勇者と閣下は同時に攻撃をし、閣下は斧と盾で防ぐが、二人の攻撃を受け壊れ、二人は再び体制を整え、再度攻撃をした。俺はこれで決まったと思った。

見事、二人の攻撃が閣下に通じて、閣下の防具が砕けてセクシーな恰好になったのだったが……………俺はある物を見過ごせなかった。

「あれって、明らかに自爆だよな。まあいいか」

「このまま続けてやってもよいがそれでは、ちと両国民へのサービ
スがすぎってしまうのう」

セクシーなポーズを決める閣下。というか本当に面白いな

「レオ閣下、それでは……」

「ん……ワシはここで降参じゃ」

その声と共に閣下の後ろ、つり橋エリアの外側から光が花火のように上がり綺麗に彩った

『まさか……まさかのレオ閣下敗北、総大将撃破ボーナス350点が加算されます』

俺はとりあえず、閣下にコートを羽織らせようとしたが、

「うむ、良いぞ。それを羽織らせるのは垂れ耳にしておけ」

あっ、やっぱりこの人も気づいていたな。あの事に……

そして、閣下はマイクを受け取りインタビューを受けていると、エクレが俺のところに来てきた。

「二週間ぶりだな。シンヤ」

「そっちこそ、お疲れだね」

「まあな。それにしても、レオ姫の攻撃を受けきるとはどういう技を使ったんだ？」

「さあ、俺にも良くは分からないけど、とりあえず、ほれ」

俺はエクレにコートを渡した？エクレ何が何だか分からなかったよ
うだが……………

「予知してやる。良い感じにサービスになるぞ？」

「はあ？」

とりあえず、俺はエクレから離れると、閣下はエクレの方を向きながら撮影班に何か言っていた

「何だ？コートを渡したのか」

「さすがに可哀想だから……………」

といった瞬間、俺と閣下の予測どおりエクレの服が破れ、エクレは裸（パンツは残して）になってしまった。エクレは勇者を殴り、俺が渡したコートを羽織っていた。

「シンヤ、お前も気がついてたのか」

「まあ、洞察力がこれでもいいので、」

「ふむ、気に入った。この間の森で犬姫と話して、お前を両国の傭兵にしたいと思う。どうだ？」

「傭兵ですか、まあ、今回はガレットに行ったから次はミルと姫のほうですけどね」

「何だ？傭兵は嫌だと思っていたのだが……………」

「俺は剣士なので、こういったものは好きですから、」

「そうかじゃあ、今度また会おう。」

こうして、俺は二週間ぶりにビスコッティに戻ってきたのだった。

第八話 お茶を飲んでのんびりしよう。(前書き)

六甲水「怖い」

真夜「何がだ？」

六甲水「今日、家族に紹介されたホラー系スレみたんだけど、八尺様って怖いね」

真夜「知らん。というか、本編と関係がないだろ」

第八話 お茶を飲んだのんびりしよう。

『今回のイベントはやはり、』

戦に勝利したビスコッティ、只今上空にあるモニターにはミルヒ姫がインタビューを受けていた。俺はというと、ビスコッティの兵士からもらったお茶を飲んでいた。

「はあ、お茶は美味しいな。」

とのんびりと過ごしていた。まあ、後ろのほうでエクレが勇者、シンクを追い掛け回した。

「この馬鹿勇者ああああああー、」

「待って、ごめん。本当にごめん」

と二人は走り回っていた。まあ、傍から見ればただいちゃついているようにしか見えないけどな。とりあえず、このまま放っておくのも可哀想だから、シンクに助け舟を出すことに……………

「エクレ、いい加減着替えないと風邪ひくぞ」

「うっ、戦中だから着替えは持ってきてないんだ。」

と俺が貸したコートを羽織りながら、恥ずかしそうにいうエクレだったが……………

(それにしても、俺のほうが体が大きいからエクレには合わないか

ら、ダボダボだし、それに中が裸だからエクレのふとももが……
くっ、中学生にはきついぜ)

とりあえず俺は心のなかで欲求に耐えることにした。まあ、いいものが見れたことに対しては、シンクに感謝だな。

そんなこんなでシンクがエクレにしばかれる中、俺は白姫と紫姫を眺めていた。

「そういえば、結局この剣は何なんだ？というか何で使い方まで分かるようになったんだ？」

と剣の事で悩んでいると、着替え終わったエクレと団長とシンク（何か落ち込んでる）の三人がやってきた。

「久しぶりだな。シンヤ」

「団長、二週間ぶりです。というかシンク、何落ち込んでるんだ？」

「いや、何とというかちょっとね。」

「もしかして、勇者召喚されてきたのはいいけど、実は帰れないと
いうことに気がついて落ち込んでるのか？」

「な、何で僕が考えてることを……………もしかして人の心を読める
の？」

「いや、思いっきり想像だったけど、まさか当たってなんてな。」

まあ、想像というか、シンクの落ち込みようを見れば誰だって分か
るけど……………とりあえず団長に剣の事を相談しよう。

「そういえば、団長。剣を持ってきたけど、この剣について何か知
ってますか？」

「ん？何かあるのか？」

俺は団長に剣の力について話したのだが、団長も剣について分から
ずにいた。とりあえず、団長はまだやることがあるらしいので、戦
場に残るらしいから、俺とシンクとエクレはとりあえず城に行くこ
とにしたのだったが……………

「そういえば、エクレ、俺のコートは？」

「ん？ああ、メイドに頼んで洗ってもらいに行ったが、ダメだった
か？」

「まあ、別にいいけど、ちゃんと返してもらえれば、」

「真夜つて面白い性格だよな」

「シンクもな。とうかちゃんと自己紹介してなかったな。俺は綺羅木真夜。14歳だ」

「僕はシンク・イズミ。13歳だけど……年上だったんだ。」

「別に敬語とかいいから、同じ巻き込まれた中だからな。」

こうして、俺達の物語は始まるのだったが……俺はのちのち地獄を見ることになるんだ。いろんな意味で……

第八話 お茶を飲んでのんびりしよう。(後書き)

真夜「何だ？何が起こるんだ？」

六甲水「まあ、原因は前回の話しを見れば分かるよ。嫉妬してもらって仲を進展させたいからね」

真夜「マジで何やるつもりだ」

第九話 抱きつかれるのは恥ずかしい。(前書き)

六甲水「今回は少しね。」

真夜「なんだよ」

六甲水「いちやっついてもらおうか」

真夜「何をさせるつもりだ。」

第九話 抱きつかれるのは恥ずかしい。

とりあえず俺たち三人は城に戻る前に少し街を見てまわることになった。お金についてはシンクは戦で活躍したので、もちろん貰えていた。まあ、俺の場合は貰えないだろうと思っていたが……

「何で俺にもお金を？」

エクレからお金が入った袋をもらった。それも結構多い。とりあえず気になったのでエクレに話を聞くと……

「ん？さつきガレットの兵士がお前に渡してくれて、何か影で結構活躍してたらしいからな。」

影で活躍？いつそんな事をしたっけ？とそんな事を考えていると……

……戦場で確か何人が倒した気が……

「……………まあいいか。」

とりあえず、気にしないことにした俺だった。

とりあえず俺達は出店で適当に買い物をする事に……………シンクとエクレは肉の串焼きを食べていたが……

(あれって、元に戻れなくなった獣玉とかじゃないよな。まあ普通に考えてそんな事はないだろうけど、異世界だからな。)

と怖いことを考えてるいた俺だった。するとエクレが串焼きを渡してきた。

「食べないのか？」

「ん、なあ、エクレ。一つ聞くけど……………」

俺はエクレに耳打ちをするとエクレは呆れていた。

「お前、さすがにそれは無いからな。この肉はただの家畜の肉だ。安心しろ」

「まあ、一つの可能性だから。」

「何の話？」

俺とエクレが話しているとシンクも会話に混ざりたそうにしていたが……………

「気にするな。」

「聞いたら一生肉を食べられなくなる」

「二人は一体何の話をしているのさ」

とりあえず、俺が想像したことはないらしいから少し安心した。

街を歩き終わり、ようやく城に行くことになった。シンクにとっては初めてだけど、俺にとっては二週間ぶりの帰宅となる。とりあえず、リコッタあたりに俺が帰れるかどうか聞いてみることに、多分俺が帰ればシンクも帰れるだろう。そう思いながら俺達は図書室に向かった。図書室にはリコッタが忙しそうに走り回っていた。

「よっ、リコッタ」

「あっ、シンヤさん。お久しぶりです。」

と突然抱きついてくるリコッタ。リコッタ、頼むから少しは恥らい

を持ってください。エクレでも恥らいは持ってますから、

「真夜とリコッタって娘仲いいね」

「ああ、二週間前に結構一緒にいることが多かったな。」

とシンクとエクレが話しているのが聞こえていた。とりあえずこれだと話が進まないの、リコッタを引き剥がすのだった。

その頃、ガレットのテントがある場所の崖の上には、銀髪の少年が立っていた。

「へえ、勇者に姉上の紋章術を防いだ奴か。結構面白そうだな。今夜あたり仕掛けるか。」

謎の少年の思惑はシンク達には気がついていなかった。だが……

俺は一人、自分の自室にいた。シンクは携帯電話を持っていたので、電波を通じるようにして欲しいとリコッタに頼み、祭壇にリコッタとエクレと一緒に向かっていた。俺はというと連れてこられたのが素振り中だったので、携帯とかは持っていなかったし、両親はあんまり帰って来ないため心配しないだろうと思いい、リコッタから白姫と紫姫について調べることにしたのだが……

「訳がわからん。何だこの文字は……英語とか違うし……今度リコッタかミルヒ姫にでも教えてもらおうか。」

俺は借りた本をベットに投げ捨て、剣を見つめた。今この剣について分かつていることは……

一つ・ビスコッティとガレットの両国で作られた物

二つ・一本の剣だけど実は二つの剣である。簡単に言うと一本の状態と二本の状態に分けることが可能

三つ・白姫は守りの力が備わっている。紫姫は確かめていないが多分攻撃に特化した物

四つ・まだ隠された能力がありそう。(リコッタがいうには)

と云うことが分かっているが……まだこの剣には謎が多い。俺はとりあえず考えるのを止めるのだった。

第九話 抱きつかれるのは恥ずかしい。(後書き)

六甲水「早速いちゃついで、」

真夜「というか、地獄ってなんだったんだ？」

六甲水「それは皆攻略編で、やるよ」

第十話 またお風呂かと思ったら、誘拐騒ぎですか。（前書き）

六甲水「やっと皆攻略編に入れそうだよ」

真夜「何かまたオリキヤラ出るとか聞いたけど、」

六甲水「まあ、皆編だとガウと二対一じゃちょっとアレかなと思っ
たから、オリキヤラ登場させます」

第十話 またお風呂かと思ったら、誘拐騒ぎですか。

夕方、俺は調べごとを諦めて、もう一度街に行こうと思っていたら、丁度、城の入り口にシンク、リコッタ、エクレの三人と出会った。

「あれ？真夜。どうしたの？」

「ん、調べごとに疲れたから、息抜きに出かけようと思ったんだけど、シンク達は？」

俺がそう聞くと、リコッタが笑顔で答えてきた。

「勇者様が連絡し終わったので、その機材を置きに戻ったのであります。」

「連絡とれたんだ。良かった。シンク」

「うん、とりあえず、しばらくは連絡取れないって言うておいたんだよ」

「彼女にか？」

「いやいや、違う違う。ただの幼なじみだよ」

冗談で言っただつもりだけど、ここまで否定していると何か怪しいからな。シンク。

「そつえば、シンヤ。調べて何か分かったのか？」

「ん？何とというか、まずは字を読めないと本も読めないからな。悪いけど、リコッタ。後で字の読み方教えてくれないか？エクレでもいいけど、」

「私で良ければ、いいでありますよ」

「私も時間があるときに教えてやる。」

とリコッタとエクレが言ってくれた。その後、リコッタとエクレがもう一回街に出るといい、シンクはミルヒ姫と会いたいといい城に戻るらしい。とりあえず俺は………

「俺も一風呂浴びたいし、風呂行ってから街に行くか」

と俺が言った瞬間、リコッタが………

「じゃあ、私も一緒に入りたいであります。」

と言ってきた瞬間、俺はエクレにアイコンタクトを送った。

『任せたぞ』

『ああ』

「リコ。お前は後で私とだ。」

「ええ、」

とりあえず、お風呂イベントは回避できたことは確かだな。とりあえず、俺とシンクは一緒にお風呂場を目指すのだったが………俺は

部屋に着替えを忘れたことを思い出した。

「悪い、シンク。先に入ってきてくれ。多分近いから直ぐにわかると
思うから」

「うん、分かったよ。」

俺とシンクはそのまま別れたのだった。

着替えを取りに戻り、風呂場に戻り脱衣所に入ると……………

「ふえ？」

「……………」

着替え中のミルヒ姫と鉢合わせしてしまった。ミルヒ姫は多分丁度今お風呂から出たんだと思うけど……………

「あっ、シンヤさんもお風呂ですか？すみません。今すぐ着替えて出ますから……………」

と無垢な笑顔で言ってきたミルヒ姫だが……………俺的にはやっぱり色々辛いです。

「あのさ、ミルヒ姫。」

「はい？」

と着替えながらこっちを向く姫様だったけど、

「エクレか閣下か付き人に恥じらいということを教えてもらったほうがいいですよ。」

とメチャクチャ笑顔で言う俺だった。

とりあえず、色々と問題があるのでミルヒ姫が着替え終わるのを外で待つ俺だった。

「とはいえ、ミルヒ姫もそれなりに恥らいがあるけど……………絶対
に端無い格好を見せたとか思ってるんだろっな。」

と溜息をつく俺だった。すると、着替え終わったミルヒ姫が出てきた。

「お待たせしました。」

「おう、そういえば、今日ライブがあるんだっけ？」

「はい、勇者様やシンヤさんも来てくれますよね」

「まあ、シンクは来るだろうけど、俺は……………まあそこそこ興味があるから行くな」

「そうですか。では、また後ほど、」

とミルヒ姫と分かれる俺だった。そして脱衣所に行き、服を脱ごうとしていると、突然ミルヒ姫の悲鳴が聞こえた。

「何だ？」

とりあえず、向かってみようかと思うと、風呂場からシンクも出てきた。何故か海パンを履いて……………

「真夜。今の声」

「ミルヒ姫だな。てか、何で風呂に海パン」

「え、いや、というか今はそれどころじゃないでしょ」

まあ、確かにそれどころじゃないけど………てか、俺は風呂に入れずじまいか。

風呂場を出て直ぐにある庭に出ると屋根の上には縛られたミルヒ姫を抱える三人の姿があった。そして、スポットライトが当たった。

「我ら、ガレット獅子団領。」

「ガウ様直屬秘密諜報部隊。」

「……ジエノワーズ」

うさ耳、虎耳の順で喋ってきた何だかアホみたいな少女が三人現れた。よくみるとカメラもあるし……

「姫様!!」

「あれ？これシリアスな展開なの？ねえ、シンク」

「ビスコツティの勇者&傭兵。貴方の大事な姫様は我々が攫わせていただきます」

と黒髪の女の子が言うが……

「誘拐するならこっそりとか出来ないんですか？」

と突っ込むのだが……

「うちらはミオン砦で待つてるからなあ」

「姫様が歌われるコンサートまであと一刻半。無事助けに来られますか？」

「つまり、大陸協定に基づいて要人誘拐奪還戦を開催させていただきたいと思います。こちらの兵力は二百。ガウル様精鋭部隊。」

「で、勇者様はガウル様と一騎打ちをお望みです。それに、傭兵さ

んもあなたにふさわしい相手を用意しております。」

「いや、そこまで気を使わなくていいから……………」

「もし断れば、姫さんがどうなるか分かってますよね。」

何かさつきから人のツツコミを無視されてるような気がするんだが

……………

「分かった。その挑戦受けて立つ」

「いやいや、本当にこのシリアス展開に付いていけないの俺だけ？
ねえ、俺だけ？」

ミオン砦の一室に銀髪の少年、ガウともう一人黒髪に黒い耳を生やした男がいた。

「勇者は受けて立つか。じゃあ、勇者は俺がやるから、もう一人の傭兵は任せたぞ。アラン」

「ああ、任せろ。傭兵ごとき私の刀の錆にしてやる」

「いや、しなくていいから。殺すなよ」

こうして、多分だが、俺の地獄が始まるうとしていた。

第十話 またお風呂かと思ったら、誘拐騒ぎですか。(後書き)

六甲水「というわけで皆編始められた。」

真夜「というか、オリキャラ怖いんだけど」

六甲水「まあ、色々と地獄だからね。とりあえず、オリジナル設定としてある人の兄貴感じだから」

真夜「そうかよ。」

第十一話 敵を騙すなら………（前書き）

六甲水「今回と次回は皆編です。」

真夜「短いな」

六甲水「書いてて、二話で十分だなんて思って………」

込んでましたよ。まあ、とりあえず言い訳ぐらいはしとくか。

「俺は止めたんだけど、シンクが、『俺はバトルオタクだから受けてやる』ってうるさくって」

「僕、そんな事言っていないよ」

とりあえず責任はシンクにでも押し付けようとしたのだが、失敗で終わるか。

「馬鹿話はそれぐらいにしておけ。今直ぐに向かうぞ」

エクレはそう言って、俺達はミオン砦に向かうのだった。

エクレとシンクが助っ人としてリコッタを呼びに行く中、俺は白姫

と紫姫を見つめた。

「これで戦うのも三回目か。まあ、今回は長引きそうだけどな。」

今まで白姫と紫姫と使ったの戦いは、一回目は無意識の中ミルヒ姫とリコッタを助けるために使い、二回目は頭の中でイメージが浮かび、閣下の紋章砲を防ぎきった。多分初めての戦はこれになるんだろう。

「どうなるか、分からないけど……頼んだぜ。白姫、紫姫」

俺は二本の剣に言うと、エクレが連れてきた黒いセルクルに乗り、砦へと向かった。

セルクルに乗りながら、シンクが受けた宣戦布告について説明を受けた。それも今回はミルヒ姫のコンサートもあるから時間との勝負ともなる。そんな中シンクは言ってきた。

「ごめん、リコッタ、エクレール、真夜。勝手なことをしてごめん。でも、僕らの世界じゃ悪者が姫様を誘拐するのは大変なことなんだ。だから、黙ってられなかった。でも姫様を助けるし、コンサートにも間に合わせる」

シンクはそう言って、神剣パラディオンから白い棒を取り出した。

「まあ、巻き込まれた以上俺も付き合っしか無いだろ。」

「当たり前だ。」

「はい、私も微力ながらお手伝いするであります」

「うん、よろしく三人とも」

ガウルが皆でのんびりしているミルヒ姫と話をしている中、アランは外の状況を見ていた。まだ勇者一行はこちらに向かってこない。

「情報によると勇者、たれ耳隊長、砲術師、そして傭兵の四人がこ

つちに向かってきているか。本隊と合流せずにたった四人で向かうか。」

すると、砦に真っ直ぐ向かってくる三人の姿が見えた。

「三人？四人目は……………」

アランがそれに気がついた瞬間、空から赤い閃光が降り注ぎ兵士たちをなぎ払う。

「砲術師。なるほどな。では、私も動くのでしょうか」

アランは刀を手に下へと向かった。

俺とシンクとエクレの三人はリコッタの援護のお陰で砦に突入できたが、いきなり囲まれてしまった。

「おいおい、いくらなんでもたった三人で百人は難しいだろ」

「何を弱音を吐いている。シンヤ」

「でも、さっきまではリコの砲撃があっただけど、今は止まっているか

らね」

「当たり前だ。砲術師は歩兵に詰められれば無力なんだ。むしろここまでよくもってくれたと褒めてやりたい。」

俺達は隅のほうに追いやられる。そんな時奥からゴドウィンと共に黒い鎧にマントをつけた男が現れた。

「久しぶりだな。シンヤ。」

「何だ。おっさんもいたのか。」

俺は兵士を倒しながら軽く挨拶をする中、突然黒い鎧の男が蹴りを繰り出してきた。俺は反応できずお腹に直撃した。

「ぐっつ」

「「シンヤ（真夜）！！」」

シンクとエクレの二人が同時に叫んだ。俺は壁に激突したが何とか立ち上がり、男を睨んだ。

「いきなりの不意打ちか。面白いじゃん。」

「ほう、俺の蹴りを喰らい立ち上がるか。面白い男だ。將軍、予定通りこいつの相手は俺がやる。」

「任せましたよ。アラン殿」

ゴドウィンがそう言ってシンクたちに迫る。アランは刀を抜き刃先

を俺に向けた。

「俺の名は、アラン・ヴィノカカオ。俺を楽しませろよ。傭兵！！」
アランは刀を振りかざし、斬りかかる。俺は紫姫で防ぐ。

「なるほど反射神経はいいらしいが……甘いぞ」

アランの左手から突然黒い閃光が放たれ、俺はそれを直撃し砦の
まで吹き飛ばされた。

「ぐああああああ」

シンクとエクレが絶体絶命の中、ゴドウィンはとある疑問が浮かんだ。

（シンヤ、あやつは何故紫姫だけしか使わないのだ？奴には全ての
攻撃を防ぐ白姫があるというのに………）

ゴドウィンはさつきから喧嘩する二人を見る。

(まあいい。この二人を倒せば我々の勝利だ。)

「この俺様と百機を越える兵士相手に、ヒヨッコ勇者と見習いに毛が生えた小娘が抵抗できるといふならやってみやがれええええええええええええええええええええええい!!」

ゴドウィンは斧を振りかざした。シンクとエクレはやられると思った瞬間、どこからとも無く刀が降ってきた。ゴドウィンはそれを防ぎ吹き飛ばした。刀は地面に突き刺さった。エクレはその刀を見て驚いていた。

「この刀は!？」

エクレとシンクは砦の上に立つ影に気がついた。そこにいたのは笠を被った女性と白い犬ほむらがいた。

「塔馬より失礼仕った。おお、久しぶりでござるな。エクレール。しばらく見ないうちに大きくなった」

「だ、ダルキアン卿」

「えっ？」

「だ、ダルキアンだとお」

「如何にも、その斧將軍と勇者殿にはお初にお目にかかる。ビスコッティ騎士団自由騎士、オンミツ部隊頭領、ブリオツシュ・ダル

キアン」

ダルキアンはそう言って、巻物を広げてその場にいた全員に見せた。

「騎士団長ロラン殿の要請を受け助太刀に参った。」

ダルキアンが口上をしているとき、シンクはダルキアンを狙う弓兵部隊に気がついた。

「あ、危ない。後ろ！！」

シンクが叫んだ瞬間、矢が放たれたが、ダルキアンは紋章術を放つ体制に入った。

「紋章剣・裂空一文字」

紫の斬撃が矢を吹き飛ばし、さらに塔ごと切り裂き、何十人かの兵士を獣玉にかえた。

「いやー助かったでござるよ。勇者殿」

「あ、いえ」

「お、口上の途中であったな。えっと、どこまで話したか？」

ダルキアンは隣にいる犬に聞くが犬は吠えるだけだった。

「まあ、ともかく、押しかけ助つ人の推参でござる。さあ、いざ順文に勝負でござる」

その瞬間、花火が打ち上がった。それと同時に砦に入ってしまったアランがゴドウィンの方に戻ってきた。

「何があった」

「あの傭兵め、謀ったな。勇者と親衛隊長を囮に……………」

アランの言葉を聞いて、シンクとエクレも驚いていた。

「まさか……………」

「いつの間」

砦の外にいたガレットの兵士たちをなぎ払う二つの影があった。

「うむ、これで粗方一掃できたですね。シンヤ殿」

そこにいたのは金髪に小刀を持った少女ユキカゼ・パネトーネとさつきまで皆にいた真夜の姿があった。

「殆どはユキカゼのお陰だよ。」

「ユッキー　　、シンヤサーーーん」

リコツタはこちらを呼びながら、大量の花火と砲弾も持ってきた。

「ナイスでござる。リコ」

「やるな。」

するとユキカゼは倒したガレットの隊長に向かって言った。

「ちなみに、リコを捕まえようとした兵士なら、私とシンヤ殿の二人で片付けたでござるよ」

「さてと、さつさと合流しますか。ユキカゼの紋章剣みてたら、面白いの思いついたし」

「うむ、では、先に行くでござるよ。シンヤ殿」

そう言い残し、リコを背負いながらユキカゼは上へと跳んだ。残った俺は白姫と紫姫を一つに戻し、抜刀の構えを取り、紋章術を発動させた。

「紋章剣・炮烙白夜!」

白い斬撃が砦の壁を切り裂き、破壊した。そしてそこにはシンク達がいた。

「真夜!？」

「お前、さつきまでいた奴はなんなんだ？」

「白姫の特殊能力の一つ『幻影』で作った複製だよ。まあ、簡単にいえば分身かな。リコツタが一人で危ないと思ったから、陰ながら見守るようにしてたんだよ。」

「な、それならそうと言ってくれれば……………」

とエクレが怒りながら言ってきたが、俺は笑顔で返した。

「『敵を騙すならまず味方から』保険はかけとく必要があるぜ。」

「そうなんだ。って、危ない、真夜」

シンクは後ろから迫るアランに気がついた。だが、俺はアランの斬撃を振り向かずに防ぐ。

「傭兵、貴様謀ったな。」

「気がつかないお前が悪いんだよ。さて、」

リコとユキカゼの爆撃が降り注ぐ中、俺は白姫と紫姫を双剣に戻し、アランと対峙した。

「シンク、エクレ。こいつは俺がやる。二人は早く姫様を」

「「分かった。」」

俺は二人を見送ると、剣を構えながら言った。

「本当の戦いはここからだぜ。」

第十二話 紋章砲（前書き）

六甲水「今回は真夜のバトルが始まるよ」

真夜「死ぬほど痛い目に合っけどな。」

第十二話 紋章砲

エクレとシンクが砦の内部に入るために入り口を目指す中、ガレットの駐在地があるテントの一つでは、レオ閣下が怒りを現わにしていた。

「あの馬鹿者が、勝手に誘拐などしよつてからに」

「ルージュがちゃんと側にいたのですが、殿下のお痛のようですね。申し訳ないです」

とレオ閣下の側近の一人で、戦では実況を行つた少女ビオレが言った。

「国家と領主の計略をガキの遊びで乱されてたまるか」

一方その頃、ミオン砦では……シンクは先に砦の中に潜入していた。シンクはセルクルに乗りながら扉を破るとそこには、ガウルが待っていた。

「よお、てめえがビスコッティの勇者だな。俺はガレットの……」
ガウルがまだしゃべっている中、シンクは突撃してきた。

「はは、聞く耳ねえってか。」

ガウルは壁に掛けてあつた槍を手にとると、シンクの攻撃を防いだ。

「悪いけど、自己紹介はあとで聞く。今は姫様を連れて帰らせても
らうぞ」

「いいぜ。やれるもんならな」

エクレはとある三人と対峙していた。

「やはり、貴様ら三馬鹿が出てくるか」

「誰が馬鹿ですか」

「馬鹿っていう人が馬鹿」

「そつや、バーカ、バーカ」

と姫様を誘拐したジエノワーズと対峙していた。

「貴様らの相手はいろんな意味で頭が痛いが……」

「同じ親衛隊同士、このノワール・ヴィノカカオが通せんぼ」

「同じくベール・ファールトン。エクレちゃん、正々堂々と勝負
です」

「まつ、三体一やけどな。ジョーヌ・クラフティ頑張るよお」

ノワールは短剣を、ベールは弓矢を、ジョーヌは斧を構える中、エクレールも双剣を構えた。

「ビスコッティ親衛隊長エクレール・マルティノッジ。切り抜けて進ませてもらう」

広場ではダルキアンと真夜が兵士をなぎ倒しながら対峙する敵と戦っていた。

「うむ、傭兵殿ともはじめましてでござるな」

「こちらこそ、俺は綺羅木真夜。」

「ふむ、ブリオツシュ・ダルキアン。今後シンヤ殿と戦場を駆け抜けるものでござる」

「まあ、俺は傭兵だから、今度は敵同士かもしれないよ」

「その時は、容赦しないでござるよ」

俺達は兵士を片付けながら、自己紹介を終えると、アランがこちらに向かってきた。

「傭兵。いや、シンヤ。お前の相手はこの私だ」

「今度は本気で相手するからな。」

二人の剣がぶつかり合うと同時に少しだけ衝撃が起きた。アランは刀を鞘に閉まった。

「抜刀術？」

「行くぞ。紋章剣」

アランの背中に緑の紋章が浮かんだ。刻まれているのはトラみみたいだった。

「抜刀・白虎四連爪」

白い斬撃が四つ同時に襲いかかる。俺は白姫で防ごうとしたが受けきれずに吹き飛ばされた。

（やっぱ、完全じゃないな。だけど、奴の攻撃はこれでおわ……）

「これで終わらん。風雷・雷撃槍」

アランは刃に緑色の輝力を纏わせて、吹き飛ばす俺に向かって雷撃の槍を伸ばした。

エクレとジェノワーズとの戦いはエクレが若干不利だった。

「おっいっしょおおおおおおおおおおお」

ジョー又は斧を力いっぱい振り落とす。エクレはそれを避けるが斧の威力で砦の壁が破壊された。

「ノワ」

「了解」

上に避けたエクレだが、その後ろからノワールのナイフが襲いかかった。エクレはナイフを剣で弾きながら地面に着地し、接近するが

……

「ベール」

「了解」

ベールが矢をエクレに向かって放つ。エクレはそれを剣で受け止めようとするが、威力がありすぎて受けきれず軌道をずらすだけで精一杯だった。

（はあ、はあ、ガウル殿下が副審ジェノワーズ。基本的には三人とも馬鹿で間違いないが、戦いとあればやはり強い。それにシンヤが相手しているガウル殿下の用心棒、アラン・ヴィノカカオの妹でもあるからな。）

シンクとガウルの武器同士のぶつかり合いが続いていた。お互い一歩も引かない。だが、勝負は次の段階に向かうのだった。それはガウルが下がった瞬間、ガウルの槍が折れ、シンクの棒も折れた。

「へへ、いいね。十分客を呼べる腕前だ。」

ガウルはそう言って、セルクルから降りた。

「だが、もうちょっと派手な技が欲しいところだな。俺らの戦は見せてなんぼのシロモノだ。」

ガウルは紋章砲の構えを取った。

「強さと華麗さ豪快さ。その辺が騎士と戦士の必須事項。そのため
の力がこの輝力だ」

ガウルの両手両足に獅子の様な爪が現れた。シンクは警戒した。

「輝力開放。獅子王双牙」

ガウルはシンクに向かって突撃してきた。シンクは折れた神剣パラ
ディオオンで防ぐ。ガウルも負けじと連撃を放つ。シンクはそれすら
も防ぐのだが……

「天雷」

ガウルは砲撃を放ち、シンクは天井近くまで吹き飛ばす。そして、ガ
ウルは上に上がると同時にシンクの手甲を破壊した。

「爆砕陣！！」

ガウルは床に落ちるシンクをそのまま蹴りを喰らわせながら地面に
叩きつけるが、そのままシンクの上に乗りながら壁に激突するのだ
った。

「ふははは、どうよ。獅子王双牙からの天雷爆砕陣。街じゃ噂の輝

力系必殺技だ。ふん、終わったな」

鼻血を流しながら勝利を確信するガウルだったが、突然瓦礫の山からシンクが現れた。

「勝手に終わらせるな。」

「あ、あれ？いや、今のはあれで終わりだろ。何で立ってるんだ？化物か？」

ガウルはシンクの体をあつちこつちみると、神剣パラディオンの先が少し壊れているのに気がついた。シンクは地面にたたきつけられる瞬間、神剣パラディオンの先を地面につけて威力を軽減していたのだ。

(へっ、こいつ。あの一瞬であんな防御を)

とガウルが思った瞬間、シンクの頭から血が吹き出した。

「「やつぱ効いてたああああああああああああ」」

二人はテンパリながら走りまわる。ガウルはシンクのマントを掴んでいった。

「あんま無茶な耐えかたすんなよ。異世界人は獣玉になれねえんだから、無理な耐え方すると……」

と言いかけた瞬間、シンクは血を拭きとった。

「いや、余計な心配はノーサンキュー。何となく分かったぞ。輝力

「つてのはこんな感じ」

シンクは折れた二つの神剣パラディオンに輝力を纏わせると神剣パラディオンは棒から二本の槍に変わった。

「急がないとコンサートに間に合わない。皆が姫様の歌を待ってるんだ」

「は、へっ？コンサート？」

この時、ガウルはとんでもないことに気がついてしまったのだった。

そして、アランの攻撃を受けた真夜はというと、

「ほう、さすがに防御に特化した紋章術を持つだけあるな。私の奥義を受けきるとは……………」

「はは、これでもボロボロですけどね。」

白姫でアランの攻撃を防いだ俺だが、結構ボロボロの状態だった。だけど、このまま負けるのはいやだから……………

「アンタのお陰で、面白い技も思いつたし、輝力開放。」

俺は白姫と紫姫に輝力を乗せ、紋章砲の構えを取った。

「喰らえ、狼牙爆砕陣」

俺は地面を思いっきり双剣で叩きつけた。すると輝力で創り上げた狼がアランの周りを囲み、一斉に爆発した。

「ぐおおおおお、」

「閣下が使った技をちょっと真似てみたんだけど、結構効くだろ」

その時、上で様子を見ていたりコッタとユキカゼ何かを言っていた。

「大変でございます。敵増援がこっちにやってきます」

「ここで、敵増援か。」

「うむ、傭兵殿の傷ではこれ以上の戦いはキツイかもしれないでござるな」

とゴドウィンと戦っていた。ダルメキアンが言った瞬間、アランに背中を切られた。

「ぐあ」

「まだまだ。まだ。終わりじゃない。」

「傭兵殿！」

「シンヤさん。」

「シンヤ殿」

三人の心配する声が聞こえた。その瞬間、砦の扉が開かれ、セルクルに乗った閣下がやってきた。どうやら敵増援は閣下一人のようだった。

(やばいな。この傷じゃ、キツイかも。)

俺はもうダメかと思った瞬間、閣下がアランに向かって紋章砲を放ち、アランは吹き飛んだ。

「ガウルの用心棒か。シンヤ、こいつは痛め過ぎると痛い目にあうぞ。」

「はは、もう痛い目にあった後ですよ。」

「これはこれは、レオンミシエリ姫。かわいい弟殿の手助けでござるか？」

「手助け？違うな。馬鹿げた戦をしている弟を叱りにだ。」

「そうでござるか。本当ならここで立ちふさがるのが戦でござるが、

傭兵殿が傷だらけのためここは道を譲ろう。」

「うむ、行くぞ。ゴドウィン。」

「はっ」

何か軽いやり取りをして、閣下とおっさんがアランを抱えて砦に向かったけど……

「さすがに……体が痛いんだけど……」

「ふむ、リコッタ殿、傭兵殿の傷を手当してやってくれぬか？」

「はいでございます。」

その後、砦の中から閣下の大声とシンクの叫びが聞こえた気がしたんだけど……大丈夫かな？シンク。

第十二話 紋章砲（後書き）

六甲水「次回で砦編は終わりです。」

第十三話 姫様の歌声（前書き）

六甲水「今回で皆編は終わりです。」

真夜「てか、次からは日常編か？」

六甲水「まあね」

第十三話 姫様の歌声

リコッタとユキカゼの二人が俺の応急処置をし終わり、砦の中に入ってシンク達と合流しようとしたとき、閣下とばったり会った。

「シンヤ、傷の具合はどうだ？」

「ん、まあ、リコッタ達の応急処置が良かったから結構効いたからかな？まだ痛いけど……」

「そうか、悪かったな。馬鹿な弟のせいで貴様にも、ミルヒオーレにも迷惑をかけた。」

「まあ、俺やミルヒ姫はあんまり気にしないけど、閣下はミルヒ姫と仲がいいんだ」

なんとなく聞いてみると何か思いつきり睨んできたよこの閣下。何か俺、地雷でも踏んだのか？

「昔の話だ。貴様が気にするほどでもない。」

「あ、はい。」

閣下はそのまま俺と別れ、どこかへ行ったのだった。俺は後ろ髪を引っ張られる感じをしながら、シンク達がいる部屋を目指す……

「ぬおおおおおおおおお、なんてこった。なんてこった。」

と近くの部屋から声が聞こえた。俺は部屋に入るとエクレたちがいた。あと三人娘が気絶してたけど……

「どうかしたのか？エクレ」

「ん、シンヤ。てか、傷だらけだな。」

「ああ、それより何か騒いでるみたいだけど……何かあったのか？」

「ああ、実は姫様のコンサートが間に合わないんだ。」

「マジかよ。どうするんだ？俺達のやったことが水の泡じゃねえか。」

まあ、俺の場合、傷だらけになったのに全てが無駄になるのはさすがに嫌だな。すると突然シンクが何かを思いついたみたいだった。

「そつだ、姫様。僕が送っていきますよ。」

突然シンクがそんなことを言い出したのだった。俺やエクレ、それに確か……ガウルもシンクの発言に耳を疑った。

「送ってくつて、お前……」

「どござって、」

「明らかに無理があるだろ。」

「そりゃ、もちろん。この勇者超特急で」

と言いながら、ミルヒ姫をおんぶするシンク。

「シンク、それだと絶対に間に合わないぞ」

「大丈夫。えっと王子……名前なんだっけ？」

「覚えてないのかよ。ガウルだよ。」

「ガウルの輝力の使い方みて、多分行ける。」

シンクはそう言って、紋章術を発動させた。シンクの奴まさか……

「それじゃあ、行きますよ姫様」

「は、はい。」

シンクたちは紋章術を発動させたまま、窓から飛び出していった。

「なるほど、身体能力紋章術で上げたのか。これなら……」

「ああ、間に合うかもな」

「とりあえず、俺達はどうする？」

俺とエクレの二人はこれからどうするか話していると、ガウルが突然謝ってきた。

「悪かった。アランの奴が無茶やってお前に怪我させたって聞いたけど……」

「ん、大丈夫だよ。さすがに閣下が止めなかったらやばかったけど……」

「本当に悪かった。今、アランの奴は気絶してるけど……謝りに行かせるか？」

「いや、戦だったんだから別にいいけど……そうだ、今度ガウルと手合わせしたいんだけど……それでいいけど」

「ああ、いつでもいいぜ。」

何だかガウルとも仲が良くなった気がする。

それから十五分くらい経った。どうやらシンク達は間に合ったようだった。まだ砦に残っているメンバーはここで姫様の歌を聞いている

中、俺はリコッタに紋章術で傷の手当を受けていた。

「大丈夫でありますか？傷の具合は？」

「ん、ありがとう。リコッタのおかげで痛みの和らいできたけど……さすがにきつかった。」

「あ、あはは、あんまり無茶はしないでくださいね。今度、砲術師の戦い方をお教えしましょうか？」

「あー、それもいいかもな。近距離、中距離、遠距離で戦えるようになりたいし………」

「でも、もう戦は無いと思いますよ。」

「そうかもな。とりあえず、ミルヒ姫の歌でも聞くか。」

「はいであります。」

俺とリコッタはエクレたちがいる部屋に戻った。そしてモニターから聞こえるミルヒ姫の歌を聞いた。

ミルヒの歌声は何だかさっきまでの戦で傷ついた大地や人たちを癒す感じがした。俺はあんまり歌とか興味がなかった。ミルヒ姫にコンサートを誘われたときは断るうと思ったりしたのだが………

（たまには歌もいいかもな。）

こうして俺達の二度目の戦は終わったのだった。

第十三話 姫様の歌声（後書き）

六甲水「次回からは日常編になります」

第十四話 戻った日常（前書き）

六甲水「今回からしばらくは日常編っばいオリジナルの話を作りま
す。」

真夜「どれくらいやるんだよ」

六甲水「まあ、四話くらいかな」

真夜「長いな」

第十四話 戻った日常

ミヨン砦での戦いから一夜が明けて、ガレット軍も撤退の準備を進めていた。シンクたちとは言うところミルヒ姫の謁見の方に出ている中、俺は外である人物と会っていた。それは……閣下だった。俺が今いる場所はガレットの滞在地だった。兵士たちは忙しそうにテントなどを片付けをしていた。

「ほう、ではガレットに行くつもりはないというのか？」

「まあな。理由は二つあるんだけど聞く？」

「聞いてやる。」

「一つは傭兵としてまだ俺は力不足だ。こんなんじゃ、両国の傭兵として全然ダメだからな。」

「なるほど、確かにまだその白姫と紫姫に振り回されている気がするな。それで二つ目はなんじゃ？」

「二つ、前のあの砦での戦いで俺はアランに負けた感じだったし……」

「あれは一応引き分けじゃないのか？途中でワシが止めに入ったろ。」

「それはそうだけど、そっちの国には閣下やガウル、それにアランつう強い奴がいるからな。ガレットに行ってもただ訓練してるだけじゃ、強くなれない。だったらビスコッティにいたほうが俺も強く

なれるし、誰かを護ることが出来る。それが理由だ。」

「ふふ、本当にお主は面白いな。シンヤ。護るための強さと誰かを倒すための強さを秘めている気がするな。だからこそ、その剣はお前を選んだのかもしれん。」

閣下は白姫と紫姫を見て言った。言葉は何だか強さを感じたが閣下の表情は何か悲しそうだった。

「……………それじゃあ、俺は行きます。ガウルによろしく」

「ああ、次会うとしたら戦場かもな。それまでにその剣と自分を強くしておけ。何が起きるか分からないからな。」

俺は閣下のその言葉を聞いて、少しだけ嫌な予感を感じていた。閣下は何かを隠している気がしてならない。

城に戻ると同時に後ろから誰かに飛び蹴りを食らった。

「いて、誰だよ」

振り向くとそこにいたのは何故か切れかかっていたエクレとリコッタとシンクだった。

「貴様は姫様の謁見に出ずにどこをほつつき歩いていたのだ。」

「いや、謁見とか何か堅苦しいじゃん。俺そう言つの苦手だし……
…だからちよっと外でブラブラと」

「ほう、姫様より外で遊ぶことを選んだか。ならその考えを打ち砕いたやろうか？」

エクレはそう言って紋章術を発動しかけていた。とりあえず俺は白姫を取り出してバリアを張った。

「覚悟しろ。シンヤ。」

「絶対にいやだ。」

エクレは紋章砲を放とうとしたのだが、リコッタとシンクが止めに入って城の廊下が戦場にならずに済んだ。その後、俺はミルヒ姫に呼ばれていると言われ、リコッタと共に姫様の部屋を訪れる。

「お待たせしましたであります。姫様」

「リコ、シンヤさんを連れてきてくれてありがとう。シンヤさんはどこに行ってらっしゃったんですか？」

「ちょっと、散歩。それで用事ってなんだ？」

「はい、実はリコが白姫と紫姫について調べているときに、その剣には三つの形態があるときいたのです。」

「三つ？二つじゃなくって？」

俺はこれまで白姫と紫姫の形態で両刃刀と双剣しか使っていないかったが、三つ目まであるとは聞いていないし、そんな感じもしなかった。

「はい、三つ目はまだ文献で書かれていたのですが……条件がありましてフロニヤ力が満ちている場所にだけにしかない鉱石を使えば使えるようになるらしいです。」

と説明するミルヒ姫。もしかして俺がここに呼ばれた理由って……

「ミルヒ姫。もしかしてそれを取って来いとか言うんじゃないでしょうか？」

「はい、そうですね？ダメでしょうか？」

「いや、そこまで白姫と紫姫の強化を望んでいるわけじゃないし………というかミルヒ姫が見てみたいだけじゃないんですか？」

「そ、そんなことないですよ。ほ、ほらこれから何が起きるか分かりませんし、」

動揺しながらこの人言ったよ。まあ、閣下にも俺自身とこの剣を強くしておいた方がいいって言ってたし……それにいい訓練にもなるかもしれない。

「分かりました。鉱石を取ってくればいいんですよね。」

「はい、でもまだこの世界の地理も知りませんよね。リコ、折角だから付いて行ってください。」

「は、はいであります。」

こうして俺はその強化する鉱石を取りに行くのだったが……

真夜が部屋を出た後、ミルヒはリコツタに耳打ちをしていた。

「しっかりやるんですよ。これを気に仲良くなるんです」

「え、ひ、姫様。もしかしてシンヤさんに強化する鉱石があると言ったのは……それが目的ですか？」

「はい、リコが悩んでたじゃないですか？シンヤさんが自分の事を愛称で呼んでくれないって。大丈夫です。危険もありませんから、」

と言ったミルビの考えもあったのだった。

第十四話 戻った日常（後書き）

六甲水「というわけで次回はこの二人にいちやつかせます」

真夜「なんで？」

リコッタ「そうですね。普通に日常パートでいいじゃないですか」

六甲水「いや、こっちのほうが好きそうだから」

第十五話 鉾石取りはいろんな意味で一苦労(前書き)

六甲水「というわけで、今回はリコッタといちゃつかせます。」

真夜「いきなりだな。」

リコッタ「そうでありますよ。」

六甲水「いいじゃん。やりたいから」

真夜(早く本編に進めばいいのに)

第十五話 鉱石取りはいろんな意味で一苦労

「あ、エクレ。ちょっといい？」

シンクは訓練場に向かうエクレを発見した。エクレは足を止めてシンクを睨んだ。

「なんだ？勇者。私は忙しんだが……」

「いや、真夜の事見なかった？僕は今からあつちの世界に連絡とるから、折角だから真夜もどうかかって思ったんだけど……」

「ああ、シンヤならリコと一緒に出かけてるぞ。」

「二人で？珍しいような珍しくないような……」

「まあ、姫様の命令だからな。」

「姫様の？」

その頃、真夜とリコッタはというと……………

「なあ、リコッタ。方角はこっちで合ってるのか？」

「はいであります。」

二人はセルクルに乗りながら地図を確認していた。

「そういえば、ここら辺に魔物とか出るのか？」

俺はリコッタにそう質問するとリコッタは腕を組みながら答えた。

「そうですね……………フロニヤカもさほど弱くないので大丈夫でありますよ。」

「そうか……………ならいいんだけど……………もう一つ質問。俺が白姫と紫姫を手に入れた場所ってフロニヤカはどうなんだ？」

「あそこはその剣があったからでしょうか、フロニヤカは強い方でしたよ。」

リコッタの答えを聞いて、俺は少し考え込んだ。魔物とかの話は前からいろいろんな人から聞いていたが、フロニヤカが強い場所にはいなくて、弱い場所にしか生息しないと、

(なら、あの時、襲ってきた奴はなんなんだ？アレも魔物の一種だ

と思ってたけど、違う感じがするし……………それも気になるが……………
…リコッタの奴も気になる。俺が話しかけたり、近づいたりすると
顔を真赤にさせてるし……………あいつ、どこか具合がわるいのか？

俺はリコッタの方を見ると、リコッタは顔を真赤にさせて視線をず
らした。

(気になる。風邪だったら無茶させるわけにはいかないし……………)

「おい、リコッタ。」

「は、はいであります。シンヤさん」

俺はリコッタの額と俺の額をくつつけた。うむ、あんまり熱はない
ようだけど相変わらずリコッタの顔は真っ赤だ。というかさっきよ
り真っ赤な気が……………

「あ、あ、あ、あの、シンヤさん。どうなさったんでありますか？」

「ん、いや、熱があるのかと思って……………特になさそうだからいい
けど……………あんまり無理はするなよ。」

俺はそのままセルクルから降りて方角と地図を確認していると……………

「あ、あの、シンヤさん。一つ聞いていいでありますか？」

「ん、何だ？」

リコッタは顔を真赤にさせながら俺の方を見ていた。

「あ、あの、シンヤさん。実は……………」

リコッタが何かを言いかけようとした瞬間、突然上から何かが降ってきた。俺は咄嗟にリコッタを守ろうと思い、白姫と紫姫を構えた。

「いたた、おい、ノワール。大丈夫か？」

「ええ、ですが流石にがけ崩れから逃げるとはいえ飛び降りるのはどうかと……………」

何故か聞き覚えがある声だった。煙が晴れるとそこにいたのはガウルとジェノワーズの一人ノワールだった。

第十五話 鉱石取りはいろんな意味で一苦労（後書き）

六甲水「次回は白姫と紫姫の強化です。」

真夜「というか、リコッタとの関係はどうなるんだ？」

リコッタ「//////////」

六甲水「それは次回あたりで、」

第十六話 両刃剣、双剣に続く新たなモノ（前書き）

六甲水「今回はさ、その」

真夜「なんだよ。」

六甲水「まさかこの段階でやるなんて思って見なかったけど……
やっちゃった」

真夜「何をだ」

第十六話 両刃剣、双剣に続く新たなモノ

俺はリコッタと一緒に白姫と紫姫に必要な鉱石を取りに行くのだったが、リコッタの様子がおかしかったり、さらには付いてくる人が二人増えた。

「いやー、悪かったな。シンヤ。まさか姉………がけ崩れから逃げてる途中にお前らに会えるなんて、それに付いてきてもいいって、」

「まあそこまで危険な場所じゃないし、俺的にはちょっとガウルが来てくれて嬉しいからな」

「ん？何がだ？」

俺はリコッタの方を見ると、リコッタはノワールと一緒に何かを話していた。するとリコッタは俺の視線に気が付き、笑顔で返してきた。

(やっぱりちょっとおかしいな)

「それにしても、白姫と紫姫だけ？その強化する鉱石取りって色々と考えてるんだな。姫様も」

「ちょっと抜けてるけどな。それよりガウル。お前、がけ崩れという名の閣下の攻撃から逃げてるだろ」

俺がそう言うとガウルは冷や汗をかいていた。

「やっぱり、がけ崩れから逃げるなんて明らかに無理だろうと思っ

てだし、それに音すらしなかつたからな。大方サボってたんだろ」

「……………シンヤ、お前色々とスゲエな。正解だよ。ジェノワーズと一緒にサボってたのを姉上に見つかつて、逃げてたんだよ。そんで逃げた先にお前らがいたというわけだ。それで頼みなんだが……………」

「一緒に謝りに行けつてというのは嫌だぞ。」

「頼むよ。」

私はシンヤさんとガウル殿下が楽しそうに話しているのを見て、少し羨ましく思っていた。

「はあ、シンヤさんとガウル殿下は仲がいいですね」

「歳が同じ位ですから、でも私から見るとは貴方と傭兵の方が仲が良さそうに見えますが」

ジェノワーズの一人、ノワールがそう言うとはちょっと落ち込んだ。どんなに仲が良さそうにみえてもシンヤさんが私の事をあだ名で呼んでくれないし……

「……………シンヤさんの馬鹿」

「……………」

しばらく歩いているとようやく目的地の洞窟にたどり着いた俺たち。俺とリコッタは目的のものを手に入れた。

「これが鉱石か。」

「は、はい、これで強化されるはずであります。」

いろいろとあったがようやく目的地の物を手に入れることが出来、俺はひと安心したのだが……………突然洞窟内が揺れ始めた。

「な、なんだ？地震か？」

「え、でも何でいきなり……………」

すると洞窟の天井が崩れ始めた。俺はリコッタを護るために紋章術で瓦礫などを守った。そして数分が経ちようやく揺れが収まると、見事に瓦礫に寄って出口が塞がってしまった。すると外からガウルの声が聞こえた。

「おい、大丈夫か？」

「ああ、何とか……………でも出口塞がったから出れそうにないな。」

「それだったら俺の紋章砲で……………」

「いや、それだと俺達がいるスペースが崩れるかもしれないから……………地道に掘るしか無いな。悪いんだけどミルヒ姫が閣下に言ってきたくないか？」

「お、おう、ノワ。俺は姉上のところに言ってくる。ノワはビスコッティに」

「分かりました。」

ガウル達は手分けして助けを呼びに向かった。残された俺とリコッタはとりあえず助けが来るまでじっとすることにしたのだが……………

「なあ、リコッタ。」

「は、はい、何でしょうかシンヤさん。」

「お前、やっぱり調子悪かったりするの？」

「そ、それは……………」

「もしかして体調が悪くて無理に付いてきたとかか？ だったら俺は
一時間ぐらい説教するけど……………」

「いえ、そんな事はないですけど…………… ちょっとその…………… シン
ヤさん。一つ聞いていいでありますか？」

リコッタはまた顔を真赤にさせながら聞いてきた。もしかして俺に
なにか原因があるとかだったら必死に謝るけど……………

「何だ？」

「えっと、エクレのことは『エクレ』ってあだ名で呼ぶますであり
ますよね。」

「ん、ああ、呼びやすいし……………」

「それじゃあ、私のことは『リコ』って呼ばないのは何であります
か？」

リコッタはそう聞いてきた。もしかしてずっとその事を思っ
ていてとか……………

「もしかして、気にしてたりした？」

「はい、あと、あとはその…………… エクレと仲良く話して
るのを見てこう胸がキュウと締めつかれる感じをしたり……………
その…………… 私シンヤさんのこと……………」

俺はこの時、リコツタが何を言おうとするのか予想できた。まさかこの状況で言うなんて……………

「好きであります。」

「……………ありがとうな。リコ。俺もお前が好きだよ。」

俺はリコの頭を撫で、立ち上がり白姫と紫姫を取り出し柄の真ん中に鉱石をはめ込んだ。すると白姫と紫姫の形がだんだんと変わり始め、白と紫の弓に変わった。

「さてと、折角リコが告白してくれたことだから、俺はリコのためにここから脱出しますか」

「え、でも紋章砲とかでやったらここが崩れるんじゃない……………」

「白姫は護りに特化してるからな。瓦礫が落ちてこないように周りをバリアで保護する。そして……………」

俺達の周りに薄いバリアが貼られ、俺は弓を構えた。

「一気に撃ちぬく。『一点閃光』」

紫色の矢が瓦礫の山を払いのけ、外までの道が完成したのだった。俺とリコは急いで出た瞬間、洞窟が崩れてしまった。

「さて、無事に終わったな。」

「は、はいでありますね。シンヤさん。」

「あのさ、さん付け禁止。」

「へっ?」

「その、折角恋人になったんだからさん付けはちょっとな。それ守れなかったらリコの事リコツタって呼ぶからな。」

「そ、それはいやであります。し、シンヤ……………さん。」

「……………まあ慣れるようにするか」

それから直ぐにガウル達が閣下とエクレたちを呼んできてくれた。難過ぎたのだったが……………リコを危険なことに巻き込んだことをエクレにおもいつきり怒られたのだった。まあ聞き流したけど……………少し気になったのが、閣下が俺の方を見て何だか驚いていたのが気になった。とはいえ、強化を終え、さらにリコと恋人同士になった俺だった。

第十六話 両刃剣、双剣に続く新たなモノ（後書き）

六甲水「おめでとう。」

リコッタ「//////////」

真夜「まさか本当にこの段階でやるとはな」

六甲水「もうくっつけてもいいかなって思ってたさ。」

真夜「それで次回は？」

六甲水「原作に戻るかな。そういえば原作での魔物との戦いとかどうしよう?。」

リコッタ「どう巻き込まれるかですか？」

六甲水「まあね。あとシンの裏設定でとあるキャラの二どもって話もあるし……………」

第17話 星詠み 前編（前書き）

六甲水「やっと本編に戻れたよ。今回は星詠みの話です。」

真夜「やっとあげられたな。」

六甲水「まあね。君の場合はリコッタといちゃつかせるから」

第17話 星詠み 前編

鉦山でのリコからの告白から数日が経った。俺は新しく手に入れた能力を使いこなせるように兵士や団長、エクレ達と一緒に訓練をしていたのだが……

「とうか、弓矢とかあんまり使ったことがないんだけど……」

いつも剣道の練習をやっていたせいか、弓道はさすがに不得意であんまりしつかり的に当たらなかった。

「なあ、エクレ。弓矢とか得意なヤツとかいないのか？」

と汗を拭いているエクレに話しかけると……

「ん、ああ、シンヤは弓も使えるようになったんだな。私もあまり得意じゃない。そういうことならユキカゼに教えてもらえばいいだろ。」

「ユッキーか。その内聞いておこうかな？」

「待て、ユキカゼを普通にあだ名で呼んでるんだお前は……」

「いや、呼びやすいから。」

「お前は……」

エクレはため息を付いた。するとシンクとリコの二人が厨房からの差し入れを持ってきてくれた。

「エクレ、シンヤ……さん。」

「リコ、シンヤの名前を呼ぶときに顔を赤くするな。シンヤも恥ずかしそうだなぞ」

とエクレが突っ込む中、リコの頭を撫でる。

「まだ慣れないな。」

「はい、ちょっと呼びにくいというか……その、慣れようと思ってもあまり慣れなくて……」

「まあ、直ぐに慣れなくてもいいし……」

「は、はい。」

俺とリコが話している間、シンクとエクレはというと……

「ねえ、エクレ。やっぱり二人って付き合ってるの?」

「ん、そうだ。というかこの間話しただろ。まだ信じられないのか?」

「いやー、まだね。そういえば、エクレはお菓子がいいの?」

「私はまだ稽古を続けたいからな。」

「それじゃあ、僕が相手しようか」

「それはいいな。勇者殿。また相手を頼む。皆の者もよく見ておけ。」
とシンクとエクレの話聞きつけた団長が言い出した。俺も実際エクレとシンクの戦いを見ておきたかったし……興味があった。

「それにシンヤ殿もどうか？バトルロワイヤルと言うもので……」

「団長。俺は今回見学に……」

「シンヤさん。私もシンヤさんが戦っているところ見てみたいです。」

「よし、任せろ。」

リコに頼まれちゃ、戦わないわけには行かない。そう思い、剣を一本取り出した。

「ふん、扱いやすい男め。」

「エクレ、何かひどい言い草だね。」

「それより、白姫と紫姫は使わないのか？」

「さすがに訓練で使ったら可哀想になって、アレ、能力が強すぎるから」

俺が白姫と紫姫の能力について言うと、エクレは苦笑いしていた。

「確かにバリア貼られちゃ、こっちは手の打ちようがないな。それ

より、勇者。今日の武器は何にするんだ」

エクレがそう聞くとシンクが持ち出したのは……剣だった。シンクは剣を上高く投げ、鞘を回転させながら、上手く剣が鞘に収めた。

「派手好きが」

というわけで、俺とエクレとシンクの三人での模擬戦が始まった。

「シンヤ、お前とは二度目だな。」

「そついえばそつだっけ。」

「へえ、二人つて一回やったことあるんだ。でも、僕だつて……」

シンクはそう言って、鞘を捨て、俺とエクレに向かっていった。だが、シンク。お前は一つ過ちを犯したぜ。何故なら……鞘を捨てたからだ

「甘い。」

シンクと俺の剣が何度か交わる中、エクレはその隙をついて、俺の横から攻撃を仕掛けてきた。

「さすがはエクレ。一番最初に俺を潰しに来たか。」

「当たり前だ。お前を先に倒して、アホ勇者は後でも倒せるからな。」

「僕ってそんな扱いなの？」

シンクがやんわりとツッコミを入れた。俺は持っていた鞘を使い、エクレに投げつけた。

「なっ、」

エクレは鞘を避けると、俺は少し後ろに下がり、シンクは支えがなくなり、前にふらついた。

「うわ、」

「な、邪魔だ。勇者」

二人は見事にぶつかり合ってしまった。俺は急いで鞘を拾うと剣を鞘に収めた。二人は体勢を立て直しながら言ってきた。

「なんだ、もう終わりか？」

「ちょっと、待ってエクレ。真夜。まさか……………」

「ああ、そのまさかだ。」

俺は抜刀術の構えを取った。シンクとエクレは剣を構えた。どうやら防ぐらしいが…………

「抜刀剣!!」

その瞬間、つい力が入りすぎて紋章術が発動してしまい、二人の剣を折り、さらには二人は壁まで吹き飛ばしてしまった。

「さぼ、やり過ぎた。」

「やり過ぎた。シンヤ」

模擬戦が終わり、俺はエクレにメチャクチャ叱られていた。シンクはといつとあまり気にしていなかった。

「まあ、まあ、エクレもほどほどに、つい力が入っちゃう事だつてあるよ。」

「そうですね。エクレ。あまり叱らないでください。」

「たくっ、今度やったら私も紋章術を使って反撃するからな」

「以後気をつけます。」

第17話 星詠み 前編（後書き）

六甲水「次回はシンクと一緒にダルキアンの所へ行きます。」

第十八話 星詠み 中編（前書き）

六甲水「やっと更新できた。」

真夜「というか最終回どうするんだよ」

六甲水「ちゃんと考えてるよ。」

第十八話 星詠み 中編

今日はシンクと一緒にダルキアンの所に来ていた。シンクはダルキアンと一緒に川へ釣りに行き、俺はというと……

「えっ、弓矢でござるか？」

「ああ、俺自身弓矢の使い方とか分からないからさ。エクレにその事話したらユツキーに聞いたほうがいいって教えてもらったから」

「ふむ、私ならいつでも力になるでござるよ。その前にシンヤ殿の腕前を見てみたいでござるな」

「ん？弓の？別にいいけど……」

俺とユキカゼは森の中にある訓練場らしき場所に来ていた。結構広く弓的などが置いてあったりした。

「では、あそこの的を射ってみるでござるよ」

「了解。」

俺は紫姫と白姫の形態を弓矢に変え、一本の矢を出現させた。この弓矢のモードだと矢も頭の中で思い浮かべれば直ぐに出すことができることにこの間気づいた。俺は弓を引いて、的を狙った。そして直ぐに矢を放つと矢は的の真ん中に命中した。

「おお、お見事でござるよ」

「うーん、まだ止まってる的なら当てられるけど、動いてるものは狙えないんだよね。」

「ふむ、それは練習次第でござるな。あとは細かいところを直していけば直ぐに何とかできるでござるよ」

「ありがとう。また聞きにいくよ。」

「ん？夜に姫様と密会？」

「いや、違うよ。」

ダルキアン卿達と一緒に川で魚を食べていると、シンクからそんな事を聞いた。

「ただ、姫様と夜に庭園で会って話をしたんだよ。」

「なんだ、てつきりシンクとミルヒ姫は勇者と姫という地位を超えたデートをするために密会すると思ったのに……………」

「何でそんな事思ってるのさ。」

「普通に見るとシンクとミルヒ姫はお似合いだからさ。ねえ、ダルキアンさん。」

俺はダルキアン卿に話を振ると……………

「ふむ、たしかにそうかもな。そうであつたら国中でお祝いしないといけないでござるな。」

「勇者殿と姫様の結婚式ですね。それは楽しみにしてます。」

「二人まで……」

第十九話 星詠み 後編（前書き）

六甲水「やっと星詠み回の終了です。」

真夜「やっとだな。」

六甲水「まあ、シンクとミルヒの話じゃなくなって、君とリコッタの話だけだね」

シンク「ひどっ」

第十九話 星詠み 後編

夜、シンクはミルヒ姫との夜の密談を行っている頃、俺は図書館でリコツタと一緒にいた。

「今頃、シンクとミルヒ姫は密談中か」

「シンヤさん。密談というのは……ちょっと……」

「まあ、本当のことだからいいじゃねえか。それで勇者召喚の方はどうなったんだ？」

「えっと、あんまり進んでないであります。」

リコは少し疲れた表情をしながら言った。ここ最近あんまり休めてないようだった。俺はそんなリコを見て……

「リコ、少し横になつたらどうだ？」

「いえ、大丈夫でありますよ。シンヤさんももうお眠りになったほうがいいでありますよ……きゃあー！」

休む気がないリコを俺は無理やり寝かせ、膝枕をした。リコは少し恥ずかしそうにしていた。

「あ、あの、シンヤさん。恥ずかしいであります。」

「無理してる彼女の言葉なんて聞けない。ほら、少し寝てろ。」

「うう、シンヤさんは膝枕する側であります……私はドキドキして眠れないであります。」

「安心しろ。俺もドキドキしてる。リコの髪が膝に当たってちょっとな」

俺がそんな事を言うとりこは顔を真赤にしていた。やっぱりこう言うのは恥ずかしい。

「そういえば、星詠みってなんだ？」

「いきなりどうしたのでありますか？」

ふつと俺がそんな事を聞くと、リコが何故そんな事を聞くのか聞いてきた。

「んー、ちょっと前にミルヒ姫からそんな事話してたの思い出してさ。それで星詠みって何なの？」

「えつとですね。簡単に言いますと映像板を使って遠くの世界や少し未来が見える紋章術であります。姫様もそれを使って勇者様やシンヤさんの世界の事を見てたりしたんであります。」

「へえー、未来予知ね。」

ガレット獅子団領

とある一室でレオ閣下は星詠みを行っていた。

「やはり未来は変えられない」

映像板に写されていたのは血まみれで倒れているシンクとミルヒ姫の姿だった。そして板には文字が浮かび上がっていた。

『30日後、パラディオンとエクセリードを持つ者は死する運命。それは決して逃れられない。』

「何故だ。何故二人の運命を変えられない。シンヤは変えることが

出来たというのに……」

少し前にレオ閣下は真夜の未来を星詠みで見てみた。真夜はリコと共に洞窟のがけ崩れに巻き込まれ、リコを庇って死ぬという運命だった。だが、そんな運命を真夜は乗り越えた。だが、今回はさらなる悲劇の未来だった。

「何故、何故、シンヤが……あの二人を殺すのだ。」

映像板に写された映像には続きがあった。それは紅い刀を持った真夜が死んだ二人の返り血を浴び、不気味な笑みを浮かべている姿だった。

翌日、真夜は朝早く目覚め稽古をしていると……シンクとミルヒ姫の姿を発見した。

「シンク、ミルヒ姫。何やってるんだ？」

「あ、真夜。」

「おはようございます。シンヤさん。朝から稽古ですか？」

「まあな、それで二人は？」

「僕たちはこれから散歩だよ。」

「へえ、散歩か。いや、散歩という名のデートか」

俺がそういうと二人は顔を真赤にしていた。ふっと俺はある事を思いついた。

「折角だから、俺もリコと散歩するか」

第十九話 星詠み 後編（後書き）

六甲水「次回はリコとのデートです。」

第20話 リコとのデート（前書き）

六甲水「久しぶりの投稿だね。」

真夜「何をやっていた？」

六甲水「ゲーム」

真夜「馬鹿だ。」

六甲水「今回は新作のキャラがちよっと出ます。」

第20話 リコとのデート

俺は図書館を訪れていた。理由は今朝シンクとミルヒ姫が散歩という名のデートへ行く所を目撃し、俺もリコと一緒にデートに向かうと思ったのだった。

「リコ、いるか？」

「あれ？シンヤさん。どうなさったのでありますか？」

「ん、いや、一緒に散歩にでも行かないか？」

「ほえ？散歩ですか？」

「まあ、散歩という名のデートだ。」

デートと聞いて、顔を赤らめるリコ。俺も結構言っていて恥ずかしい。

「そ、それは……その、」

「まあ、何とか息抜きとかも大事かと思って……いや、リコとデートに行きたいのは本当だぞ」

「は、はいであります。シンヤさんが良ければ……その、一緒にデートに行くであります。」

こうして、俺とリコはデートへ行くのであった。

リコは少し準備があると言って、俺は先に城門前で待っていた。とりあえず、用心のために白姫と紫姫は持っていくことにしたが……

(そういえば、結局この双剣についてまだ何もわかってないよな。何で俺を選んだとか……)

俺は双剣を見つめていると、リコが大きなりュックを背負いながらやってきた。

「お待たせしましたであります。」

「大きな荷物だな。何が入ってるんだ？」

「えっとですね。食堂の人達にシンヤさんとデートに行くと言ったら、こんなに持たせてくれましたであります。」

「何というか、多すぎだろ。ほら、俺が背負ってやるからな」

俺はリコから荷物を受け取り、背負った。見た目と違ってそこまで

重くはなかったが……これが全部お弁当だったら多すぎだろ。

「なあ、リコ、これ全部お弁当か？」

「違いますよ。中には色々と機械が入ってあるであります。」

「機械？」

「はい、シンヤさん、あまり元の世界とは連絡取っていないみたいだったので、勇者様にお話ししたら、携帯電話を貸してくれましたであります。これで連絡が取れるでありますね」

「うーん、まあ、ありがたいけど……俺の両親は基本放任主義だからな……」

「ホーニンシユギ？それって何でありますか？」

「まあ、簡単に言うと俺の生活とかは問題ないから放つといっても大丈夫だって意味だよ。」

「そうであったのでありますか。それじゃあ、あんまり連絡しなくてもご両親は心配なされないのありますね。それじゃあ、連絡とつても……」

リコが少し残念そうな表情をしていると俺はある人物を思いだした。

「いや、一人だけ連絡取りたい奴がいたな」

俺がそう言った瞬間、リコは嬉しそうな顔を浮かべた。

「それは誰でありますか？」

「んー、それは連絡取れる場所についてからだな」

俺とリコは一緒にその連絡が取れる祭壇に向かった。

祭壇にたどり着くと俺はリコが借りたシンクの携帯を受け取り、あ
る人物の番号を打ち込んだ。

「準備できましたよ。」

「ありがとう。」

準備ができ、俺は電話をかけた。しばらくコールになると……

『もしもし、』

「あ、繋がった。」

俺が電話をした相手は……宗谷陽。俺の幼なじみであり、剣道のライバルでもある。陽だけには連絡取りたかった。

『何だよ。いきなり電話なんかして……それに何か電波悪そうだぞ。』

「まあ、今はちょっと変わったところで剣の修行中だからな。」

嘘は言っていない。嘘は……ただ少し気になったことが一つ……

「お前、今は家か？何か女の人の声が聞こえるんだけど……」

『あー、今は………何というか………外国で武者修行を………』

『ねえ、ねえ、ヨウは誰と話してるの？』

『本当に変わった機械だね。そんな小さなもので遠くの人と話せるなんて………』

『わあ、ちょっと、メルル、トトリ先生。』

「何だ？女の子の所にもいるのか？」

「シンヤさん。誰と話してるでありますか？」

『お前も誰と一緒にいるんだよ。』

「彼女が出来たから、彼女とデート中」

『てめえ、羨ましいぞ。こっちはお転婆姫様と小さな19歳と一緒にいるんだぞ』

「お姫様？」

『あー、何というか……この話は後でな。それじゃあな。』

陽は電話を切った。

「何というか、あいつも変な事に巻き込まれてたりしてな……」

こうして、俺はライバルとの電話を終え、その後、リコと一緒に城へ戻るのであった。だが、城に戻った時、俺は新たな戦争に巻き込まれるのであった。

第20話 リコとのデート（後書き）

六甲水「という訳で新作の主人公がゲストとして出しました。」

真夜「それで、その新作はいつ頃になるんだ？」

六甲水「早くても20日くらいには……………」

陽「心配だな」

第二十一話 宣戦布告は突然起きる。(前書き)

六甲水「というわけで、宣戦布告の話です。」

真夜「もうラストに近いけど、俺はどうなるんだ？帰れるのか？」

六甲水「さあ、」

真夜「おい、」

六甲水「あと後書きでアンケートを載せます。」

第二十一話 宣戦布告は突然起きる。

親友と連絡が取ることができ、リコとのデートも何とか終わった。そして俺とリコが城へと戻ると何故かエクレとユツキーの二人がなにか話していた。

「エクレ、ユツキー。こんな所でどうしたんだ？」

「おお、リコにシンヤ殿。お二人はデートでござるか？」

「ふえ、ユツキー。何で分かったでありますか？」

顔を赤らめたりリコがそんな事を言つと、エクレが腕を組みながら……

「朝から二人の姿を見なかったからな。きっとデートだろうと思つて、それにしてもリコ。今から三人でお風呂に入ろうと思つたんだが、」

「おお、私も歩き疲れたのでお風呂でのんびりしたいであります。シンヤさんもどうでありますか？」

リコがそう言った瞬間、俺はエクレにアイコンタクトをした。

『頼んだ』

『任せろ』

「リコ、シンヤはこれから少しだけやることがあるらしい。邪魔はしてはいけないから、お風呂は私達だけにしよう」

「そうですねか？シンヤさん」

「ああ、ちょっとやることがあってね。それじゃあ、」

俺はその場から全力で逃げるのであった。

とりあえず一緒にお風呂に入ること回避できた俺は、自分の部屋に戻りしばらく時間を潰していると、リコが突然部屋の扉を開けて入ってきた。

「どうしたんだ？リコ？」

「た、大変であります。シンヤさん。今、ガレットから……………」

何事かわからなかったが、ガレットの閣下が何か起こそうとするのが何となく予想した。

リコから聞いた話では、レオ閣下が突然ビスコッティに宣戦布告を申し込んできたらしい。それも互いの国の宝剣を賭けてだ。ビスコッティ側はパラディオン、エクセリードを、ガレット側はグランヴェール、エクスマキナを賭けるという話だった。

「それにしても、何で突然そんな事を………今までは領土だったんだろ。」

「はいであります。こんな事は初めてであります。姫様も今回の事でお悩みでありますし、」

「うーん、何か気になるんだよな。」

「気になるというと？」

「突然の宣戦布告。それに両国の宝剣を賭けた戦争。レオ閣下は何かビスコッティ側に宝剣を置いておきたくないって言うふうに感じるんだよ。それもかなり深い理由もありそうだし………」

そんな事を考えているとシンクが部屋に入ってきた。

「シンク？どうしたんだ？」

「真夜。悪いんだけど、ちょっと一緒に来て欲しいんだ。」

「？」

シンクに言われるまま、一緒にビスコッティ城の近くの森に行くとそこにはガウルとアラン、ジョーヌの姿があった。

「おう、シンク。それにシンヤ。こんな所に呼び出して悪かった。」

「突然、どうしたんだよ。」

シンクがそう聞くと、俺はガウルがここに来た理由が少しわかった。

「もしかして、今回の宣戦布告か？」

「さすがはシンヤだな。そうだ。今回の姉上の宣戦布告。俺は納得いかねえ。アランもだ。」

「ああ、私も傭兵と身でこの戦に参戦する。普通ならシンヤ、貴様と再戦が出来ることに歓喜するはずが、閣下の今回の宝剣を賭けての戦。妙だと思う。」

「はは、確かにあんたとはもう一回戦いたいけど、俺も今回は腑に落ちない。さつきまでリコと話してたんだけど、閣下には宝剣を賭けるということに理由があると思うんだ」

「どんなだ？」

ガウルが頭をかしげながらそんな事を言うと、とりあえず思いついた予想を告げた。

「まずは宝剣を手に入れて、ビスコッティをガレットの領域に置く。これは普通の戦とかでアリそうなこと。」

歴史の授業とかでそんな事を習ったことがある。シンクも分かっているはずだ。

「だけだよ。それだったら普通に戦ったほうがいいだろう。別に宝剣を賭ける必要は……」

「俺もそれが気になってるんだよ。ビスコッティにある宝剣は今、シンクが持つてるんだろ」

「うん、僕がパラディオン。姫様がエクセリド。」

シンクがパラディオンを所持していて、ミルヒ姫がエクセリドを所持か。収まる場所には収まっているんだな。

「あれ？」

「どうしたの？真夜？いきなり……」

「いや、もしかしてさ、いや、待って……………」

しばらく俺は考え込んだ。まさかこんな理由で……………それにこの話はまだ納得のいく情報がない。

「ごめん、何でもない。」

こうして、俺たちはとりあえず状況を見守ろうという話となった。俺は帰り際にガウルにある事を聞いた。

「なあ、ガウル。レオ閣下って星詠み出来るのか？」

「ん、まあ出来るぜ。それがどうしたんだ？」

「いや、何でもない」

俺はさっき考えた事と手に入れた情報を組み合わせた。それはまるでジグソーパズルをはめていくような感じだった。そして、ピースははまった。

「そういう事か。だけど……………」

俺は考えた答えを頭の中で整理した。

まずひとつ、閣下は星詠みで未来予知か何かをした。

ふたつ、その未来はパラディオンとエクセリッドを持つ者に何か危機的な状況が訪れる。

みつつ、それはシンクとミルヒ姫のことだと知った閣下は二人を助けるため、宝剣を賭けた戦を思いつき、宣戦布告をした。

(もし、それが本当なことだとしたら、シンクたちの身に何か起きる。俺が出来ることは……………)

俺は白姫と紫姫を見つめた。まだこの双剣も謎が解けていない。ただ、俺はこの二つの剣にも何かがあると思っていた。

図書館でリコが一人あることを調べていた。それは随分前から真夜に頼まれていた二つの剣についてだった。そして、リコはある文献を発見した。

「う、これは……………」

その文献に書かれていたのは、『聖剣白姫はビスコッティの3つ目の宝剣。魔剣紫姫はガレットの3つ目の宝剣。白姫と紫姫が揃いし時……………』

「はう、気になるところで終わっているであります。」

二つの剣の謎、そして宝剣を賭けた戦。それが今始まるうとしていた。

第二十一話 宣戦布告は突然起きる。(後書き)

六甲水「という訳で次回から戦争が始まります」

真夜「所でアンケートは？」

六甲水「じつはまだ買っていないのですが、DOG DAYSのドラマCDが売っていたのですが、そのドラマCDのエピソードをやったほうがいいのかというものです。」

真夜「確か今出てるはなしは海だったよな。」

六甲水「そうそう、ちなみにやるとしたら番外編としてやります。」

第二十二話 夢と始まる戦(前書き)

六甲水「というわけで少しオリジナル要素を入れます。」

真夜「どんな感じなんだ？」

六甲水「君の剣についてだね。あとちょっとした過去も……」

第二十二話 夢と始まる戦

それは見たことのない夢だった。

何人もの人が巨大な化け物と戦っている夢。その化物は皆のような大きさをし、鱐みたいな巨大な顎、まっすぐに伸びた九本の尻尾。兵士みたいな人達はそんな化物と戦っているが戦力は明らかに化物側にあった。

(なんだ？この夢は……………)

真夜は幽霊になった気分でその戦いを見つめていると、一人の男と女性が化物の前に立った。それは無謀だと思った。だけど俺はあることに気がついた。男女が持っている剣。それは……………白姫と紫姫だった。

(なんであの二つの剣を……………)

男女は二つの剣を掲げた。すると二人は二つの剣と一つになり、巨大な魔法陣で化物を囲った。その化物はそのまま魔法陣と共に空へと消えて行くのであった。

(この夢って……………もしかして……………)

するとさっきまでの風景は変わり、どこかの森に変わった。そこは俺が二つの剣を手に入れた祠だった。祠の前には国中の人達が集まっていた。そんな中、一人の男が祠に花束を置いた。

「……………王さま。姫さま。お二人の命によってガレットとビスコッ

「テイは救われました。お二人の魂はこの剣に宿っている。だからい
ずれこの剣を……と……を扱えるものが現れるまで……善き
平和を築いていきたいと思います。」

そしてまた景色が変わり、今度は真つ暗な世界だった。

「……いるんだろ。おかしい夢を見せた奴が……」

俺は何も無い空間に問いかける。すると俺の前に白い光と紫の光が
現れた。

『さすがは……のマスター。真つ白な心をお持ちですね』

『さすがは……のマスター。正しき強さを持っている。』

白い光と紫の光は交互に話しかけてきた。俺はこの二つの光の正体
はわかっていた。

「あんたら、変な化物を封印した王様と姫様だろ。いや、正確に言
えば昔のビスコッティのお姫様とガレットの王様か？」

『ああ、そうだ。私は百年前のガレットの王。今は紫姫と名乗って
おこつ』

『私は百年前のビスコッティの領主。今は白姫です。』

「それで、俺に百年前のフロニヤルドを見せた理由は？」

『……いずれ大きな災いが起きる』

『……封印が弱まっています。百年前は封印することしか手がありませんでした。』

「俺にさっきの化物を倒せと？いくらあんたらが使っていた剣でも………」

『いいえ、私達の願いは……倒して欲しいのではなく、救ってほしい。』

「どういうことだ？」

『それはいずれ分かる。だが、お前なら……いや神剣と聖剣を持った者と君ならきつと大丈夫だ。』

『ええ、貴方は気づいているはず、私達の神双剣を扱うほどの力を持つ輝力。いや、君がいた世界では……強き魔力と呼ばれるものを持った貴方なら……』

「……………」

この二人は俺の過去を知っているみたいだ。俺には本当の両親が……そして今の両親のことも……

『もしも力が必要なときは……』

『私達の……双剣の真名を呼んで』

「……………い。おい！」

「ん？」

奇妙な夢から覚めるとエクレが俺のことを呼んでいた。

「戦中に寝るとはどついつことだ」

「そつだよ。真夜。敵に囲まれているといつのに……………」

「そつでありますよ。」

「別に寝ていたわけじゃないけど……………それにしても……………シンクは人気者だな」

そう今は戦中。ミルヒ姫がレオ閣下の宣戦布告を受け入れ、宝剣を賭けた戦いが始まっていた。そして今、何故かシンクを狙った悪人面の兵士たちに囲まれていた。

「さあ、宝剣を寄越せ。」

一人の兵士がそんな事を言っていた。それにしても……………数が多い。

「たくつ、シンク、エクレ、リコ。お前らは先にいけ。ここは俺がやる」

「ふん、お前に対処できるのか？」

「そうだよ。こんな大人数……………」

「そうでありますよ。」

「大丈夫。今回ばかりは気になることが多いからね。輝力開放……………閃光狼刃陣」

紫色の光が紫姫に集まり、紫姫を大勢の兵士たちに向かって振った瞬間、剣を啜えた狼が兵士目掛け突っ込み、爆発した。

「さて、こっちはあらかた片付けたし……………お城の方はどうかな？」

フィリアンノ城では……

「姫様。ガレットから伝達があります。」

「どうしますか？」

兵士の一人がミルヒ姫に聞いてきた。ミルヒ姫は座ったまま頷いた。兵士は伝達を伝えようとする女性を入れようとした瞬間、入ってきたのはビスコッティの者ではなく、ガレットのヴィオレと近衛師団

だった。ヴィオレと近衛師団は一瞬にして兵士を獣玉に変えるのであった。

「無礼を承知でお願いがあります。ミルヒオーレ姫様。」

ヴィオレは膝をついてミルヒ姫に話しかける。だが、いつまでも返事は帰って来なかった。すると

「あの、姫様じゃないであります。」

ポンツと白い煙がミルヒ姫を包みこむとその姿はリコッタだった。するとヴィオレの頬に二本の刃が突き立てられる。

「はいそこまで」

「ミルヒ姫の予測通りだな」

そこにはフィリアンノ城のメイド長のリゼルと真夜の姿があった。

「どうやら私達がはめられたようですね。それに……真夜様も……戦場にいたのでは？」

「ユツキー作の代わりみ人形。それに輝力を込めれば……少し間だけ人形に魂を込められるからね。」

「せっかくだから、お話は紅茶でも飲みながらいかがでしょうか？」

リゼルたちメイド集団に連れて行かれるヴィオレ。俺はリコと共に

砦に行く準備を始めた。

「狼煙もあげましたであります。」

「……なあ、リコ。」

「なんでありますか？」

「白姫と紫姫のことなんだけど……なにか分かったことあるか？」

俺はあの時見た夢を思い出した。その真意を確かめるためにリコに聞くのであったが……

「いえ、文献でも『聖剣白姫はビスコツティの3つ目の宝剣。魔剣紫姫はガレットの3つ目の宝剣。白姫と紫姫が揃いし時……』って書かれていただけであります。……どうして突然……」

「いや……なんでもない。俺は直ぐに出発するから……気を付けるよ。リコ」

「はいであります。シンヤさん。」

リコと別れた俺は紋章術で創り上げたバイクに乗った。

「シンクにやり方を教えてもらったけど、明らかに元の世界だと無免許だけど……まあいいよな。」

アクセルに輝力を込めると猛スピードでシンク達が向かう皆へと向かうのであった。

『きつと……貴方なら……』

『救えるはずだ。』

頭の中に二人の姫様と王様の声が聞こえた気がした。

そして俺達はこのあと起きる大事件に巻き込まれるのであった。

第二十二話 夢と始まる戦（後書き）

六甲水「何だかグダグダになった気が……………」

真夜「いつも通りだろ。てか、俺の過去話とか……………」

六甲水「とりあえず君はとある作品のキャラの息子という事で…
……………」

真夜「それ、明らかにシンの時に出たやつじゃんか。」

六甲水「いや、やってみたくなくて……………ちなみにドラマCDの話
はやることにしましたので、」

第二十三話 グラナ塔（前書き）

六甲水「今回はついに終盤戦に突入です。あとちゃんとりこの奴はやるつもりです」

真夜「やるのかよ」

六甲水「いや、やっぱりやらないと……」

第二十三話 グラナ砦

紋章術で創り上げたバイクでシンク達が目指しているグラナ砦へ目指していた。

「バイクとか初めて乗ってみたけど……あんまり操作になれないな……」

そんなことを言っているとナレーターの声が戦場に響きわたっていた。

『おーと、ビスコッティのゲートキーパー。ガレットのガウル殿下率いる部隊に為す術もない!』

「大丈夫かな?ビスコッティ?って、気にせず早く行かないと……」

と城からハーランに乗って飛び立とうとしたリコだったけど……
そんなリコを狙うガレットの弓兵隊。

「大丈夫かな?」

バイクに乗りながらリコの心配をしているが、リコならきつと大丈夫だ。あいつも俺とシンクと違ってそれなりに戦に参加してたりするし……

そんな時、ジェノワーズの一人、ベールが放った矢がリコ命中し、リコが身に纏っていたメイド服が破られ、哀れもない姿に……それを
見るガレットの兵士たち……

「……………リコの裸を見た奴ら潰しに行くか。」

城の方へ戻り、リコの裸をみた馬鹿なガレット兵士をつぶしに行くのであった。

グラン砦に無事潜入に成功したシンク達であったが、エレベータの前にいた。

「動いてるのはこのエレベーターっだけか。」

「そうみたいだな。姫さま。ここは勇者と私が……………」

「いえ、お二人とも一つ相談したいことが……」

ミルヒ姫はシンクとエクレの二人にとある提案を持ちかけた。それは……

屋上にはレオ閣下とお付きのメイドルージュがいた。ルージュはもう少して到着するエレベータを見た

。「……………どうやら来たみたいですね。」

「来るとしたら勇者だろ。シンヤも情報でガウルの部隊と応戦中らしいが……………」

「そうですね。それに……………」

ルージュは厚い雲に包まれた空を見た。その空はもう少ししたら雨が降ってきそうな空だった。

。「……………ミルヒ。お前だけは死なせはしない。シンヤ、お前は……………ここに来た瞬間……………私はお前を斬る！」

レオ閣下は強い意志でエレベータから降りてくる人物を見つめた。だが、その人物は……………

一方真夜はというと……

「ふう、軽くぶっ飛ばしていたせいか。時間喰ったけど、ようやくグラナ砦にたどり着いた。」

俺はバイクから降りた場所はグラナ砦の前だった。それに雨を降ってきたみたいだ。

「とりあえず、屋上に向かうか。」

バイクに乗り、フロニヤ力を込めた。

「さて、壁登りでも楽しみますか！」

エレベータに乗ってやってきたのは、パラディオンとエクセリードを身に纏った騎士甲冑姿のミルヒ姫だった。

「なっ、み、ミルヒ。何故……来たんだ!？」

「……レオ姫さま。私は貴方から答えを聞きに参りました。何故、このような戦をおこすのですか?昔みたいに仲良く過ごすことは出きないんですか?百年前もビスコッティとガレットはそのような戦は……」

「黙れ!今はそのようなこと戯言は聞きたくない。」

「レオ姫さま!」

『うおおおおおおお!』

そこに更なる来訪者が現れた。それは真夜であった。真夜はバイクを消し、何とか着地し、剣を構えた。

「さて、ショートカットも上手くいったな」

「し、シンヤさん?」

「……シンヤ。お前もここに来てしまったか。」

レオ閣下はグランヴェールを構えた。どうやら俺は結構空気読まずにここに駆けつけたのかも……

「状況はまるで分からないけど……ミルヒ姫。下がっていたほうが……」

「いいえ、シンヤさん。ここは私が……」

「もういい。二人とも相手する。そして宝剣は頂くぞ」

レオ閣下の紋章術が浮かび上がった。俺はミルと姫の前に出た。こ
うなったら戦うのは避けられない。

だが、突如グラナ砦の屋上の空が割れた。その瞬間、俺の頭に声が
聞こえた。

『来てしまった。』

『ついに復活してしまった。』

「何だ？」

『マスター。気をつける。奴は………』

『魔物です!』

空から黒い球体が現れ、球体は見る見るうちに形を変え、巨大な獣に姿を変えていった。

そう、それはまるで……フロニヤルドに訪れた絶望の象徴だった。

第二十四話 絶望の魔獣（前書き）

六甲水「今回から魔獣戦の始まりです。」

真夜「というか、勝てるのかよ？俺！？」

六甲水「さあてね。」

第二十四話 絶望の魔獣

空から舞い降りたのは巨大な獣だった。尻尾は九本、その大きさはまるで山のようにだった。そして獣の周りにはいくつもの魂みたいなものが浮かび上がっていた。その獣の力のせいか、俺とミルヒ姫とレオ閣下のいる周りが浮かび上がった。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアア』

「おいおい、あれって……」

「ま、まさか……あれは……魔物？」

「えっ、こ、これは……」

ミルヒ姫が戸惑う中、魔物は巨大な尻尾をこっちに向かって振りかざしてきた。

「くそ、白姫！」

白姫のバリアで魔物の攻撃を防ごうとしたが、あっさりと打ち壊された。

「なっ、何!!」

俺はそのまま尻尾に押しつぶされそうになったが、レオ閣下の斧が魔物の尻尾を切り裂き、何とか難を逃れた。

「あ、ありがとうございます。閣下」

「お前の白姫でも無理か？」

「なんつつか力が強すぎるっていうか……………」

『ガアアアアアアアアアアアアアアア』

魔物は今度はミルヒ姫に向かっていくつも針が放たれた。ミルヒ姫はエクセリドで攻撃を防ぐのだが、魔物は前足を大きく振りかぶった。

(やばい、あれは防げない！)

ミルヒ姫の前に出て、白姫とエクセリドのバリアを重ねて強度を上げるが……………

『ガアアアアアアアアアアアアアア』

それ以上の力を持っていた魔物の爪がバリアを破壊し、魔物の爪は俺を引き裂こうとしたが……………

「危ないです！」

突然後ろから押され、振り向くとミルヒ姫は魔物の爪に引き裂かれていた。エクセリドも破壊され、その瞬間、魔物に吸収された。

「何、やってるんだ！あの馬鹿！白姫、紫姫。輝力全開放！」

ミルヒ姫が魔物に飲み込まれ、俺は怒りのままに白姫と紫姫の刃を黒い刃に変え、切り裂こうとした

「喰らいやがね！くそ化物おおおおおおおおおお――――」

「やっとたどり着いた。」

「一体、何が起こっているんだ？」

壁を自力で登っていったシンクとエクレの二人はようやく屋上にた

どり着くが、そこではレオ閣下が倒れていた。その近くにはルージユもいた。

「勇者様。エクレール隊長。」

「姫さま？」

「ミルヒ様はあの魔物に……レオ姫様もシンヤ様も助けだそうとしていたんですが……」

ルージユが指を差した方を見たエクレ。そこには壁にもたれかかり、両手には折れた剣を持った真夜の姿があった。真夜の傷は何か切り裂かれた傷で、右足が折れていた。

「真夜！大丈夫なの？」

「……な、何とか……シンク」

「何？」

「多分、ミルヒ姫はまだ生きているはず。早く行ったほうが……いい。」

「分かった。エクレ。行こう」

「だが、この天気ではフロニヤカもまともに発動できない。どうするんだ？」

「だから、ここは……」

シンクとエクレはボードに乗り、浮かび上がる岩場に移りながらビスコッティに向かっていている魔物へと行くのであった。

残された俺は……………

「ふう、ようやく痛みも感じなくなってきたし……………俺も行くか」

立ち上がろうとしたが、まだ体がフラつく。するとルージユさんが……………

「だ、ダメです。貴方はレオ姫さま以上に傷ついているんですよ。それにその体で……………」

「だ、大丈夫ですよ。この程度の傷。まだ……………」

「待て、シンヤ。」

さっきまで眠っていたレオ閣下が俺を見つめた。

「お前は……………いつてはいけない。お前が行けば……………勇者とミルヒは……………死ぬ!」

「……………星詠みでそんな未来を見たんだな。」

「ああ、お前はあの魔物と一緒に二人を切り裂く。私は……………お前たちを救うために……………」

「……………大丈夫ですよ。閣下。俺は二人を絶対に傷つけない。そんな悲しい運命なんて……………俺がぶっ壊してやる。」

俺が笑顔で言うと、突然どこからともなく刀が降ってきた。

「丸腰では危険であろう。私の刀を貸そう」

振り向くとそこにはアランがいた。どうやらガウルの命令でこっちに残ってたのか？

「ありがとうな。アラン。さて、始めようか。ビスコッティとガレットの新たな歴史はまだ始まってすらいなかったんだから……………」

「待て、お前の右足は折れて……………」

「閣下。一つ言わせてもらいます。俺は両腕が折れようとも、両足が折れようとも、四肢が全部切り裂かれようとも……………絶対に諦めるつもりはない！」

俺は強い意志で、閣下を見つめた。そして……………

「シンヤ。お前は……………何者なんだ？」

「俺は……………綺羅木真夜。いや、それは俺の前の名前だっけ、今の俺は……………」

俺は……………元の世界にいる家族……………何者かもわからない俺をここまで育ててくれたあの人達の名字で、レオ閣下の質問に答えた。

「俺は、高町真夜。海鳴市に住んでいるちょっとすごい力を持った男だ。」

「ここは……………」

確か、魔物に取り込まれたかと思ったのだが、そこは赤い空に荒れ果てた大地。そこに白い狐が横たわっていた。

「……………あなたは……………」

第二十四話 絶望の魔獣（後書き）

六甲水「次回、ついに双剣の真の名前が……」

真夜「てか、俺の名前……」

六甲水「いや、ちょっと前になのはたちの関係者だったら面白いな
って思ったんだけど、やってみたくなった。」

真夜「マジかよ。その俺の過去とかは？」

六甲水「魔物戦が終わってからだね。」

第二十五話 双剣の真名（前書き）

六甲水「今回は双剣の真の名前が明かされます。」

真夜「というか、今回で終われるのか？」

六甲水「いや、まだ終われそうにないな」

第二十五話 双剣の真名

「高町真夜？それがお前の真の名前だというのか？」

レオ閣下に自分の本当の名前を伝えた俺は、アランから借りた刀と

……

「ルージュさん。何か固定するものありませんか？折れた右足固定しておかないと戦えないので……」

「えっ、は、はい。」

ルージュさんはそう言って、固定できるものを探しに向かった。俺は閣下の方を向いて言った。

「何故、お前は私達に本当の名前を紹介しなかった。言えなかった理由でもあるのか？」

「……………最初会った時には俺にはその名前を名乗れる資格は無かったんですよ。いや、本当の家族になる資格ありませんでしたね。だからリコに家族の事聞かれたときは……………親が放任主義だって嘘をついたんですよ。きっと、今頃母さんと父さんは凄く心配してる。二人のお姉ちゃんも……………お姉ちゃんの子供も……………」

「真夜……………」

「でも、今は違う。シンクはミルと姫のために戦っている。だったら俺は？ここでのんびり休んでいる必要はない。俺も行く。」

俺はポケットに大事にしまっておいた小さな宝石を取り出した。お姉ちゃんから貰った俺の勇気の証を……

「シンヤ様、持って来ました。」

ルージュさんが足を固定できるものを持ってきてくれた。これならさっきよりはまともに歩けるはず。

ルージュさんが俺の足に添え木と包帯を巻いて固定してくれる間、アランがとある事を聞いた。

「シンヤ。どうするのだ？あの魔物の場所まで行くにはかなり距離が離れている。勇者みたいにボードで飛ぶのか？だが、この天気ではフロニヤカも弱まっている。まともに紋章術は………」

「いや、それなら、心配いらぬ。俺には勇気の証があるから……」

「…」

「ん？」

一方その頃、シンクはエクレのおかげで何とか魔物の背中にたどり着いたが、魔物が操る無数の魂魄の妨害を受けて、ミルヒ姫が囚われている場所まで辿りつけていなかった。

「か、数が多すぎる。このままじゃ姫さまが完全に吸収されちゃう。どうすれば……………」

そんなシンクの様子をミルヒ姫は魔物の意識の中で白い狐と見ていた。

「……………シンク」

「やはり我が子を救うにはエクセリードとパラディオンの力だけでは足りません。」

「それはどういっことですか？」

横たわる狐……………土地神は百年前からこの魔物……………土地神の子供に吸収をされていた。

「百年前、フロニヤルドの住人たちはガレットの王様とビスコッテイの領主の命を使って、一時的に封印をしたのです。ですが、封印

の鍵となる剣が誰かに抜かれたのです。」

「封印の剣？もしかして……白姫と紫姫ですか？」

「はい、双剣を守るための守護獣もいましたが、彼には紋章術以上の力が宿っていたため、守護獣は倒されてしまいました。」

真夜が初めて、双剣を手にしたときに現れた巨大な腕。あれが双剣を守る守護獣。それがきっかけでこの魔物が復活したというなら……

「では、この災厄は私達が……」

「いえ、封印自体弱まっていたのです。あなた方の所為では決してありません。ですが、この子を救うには……再び封印の剣が必要です。」

『うあああああー！！』

シンクの叫び声が聞こえ、ミルヒ姫は映し出された映像を見るとそこには無数の魂魄の前で膝をついて、血を流しているシンクの姿があった。

「このままじゃ……姫さまが……でも、」

無数の魂魄がシンクの周りに漂っていた。そして無数の魂魄は一斉にシンクに向かって攻撃を仕掛けた。シンクはそれを見て諦めかけていた。

(こんな所で負けるのか？姫さまも助けられずに……)

シンクは持っていた棍棒から手を離し、諦めた。

だが、一つの閃光が無数の魂魄を消し去った。

「勇者がこんな事で諦めてどうするんだ？お前は姫様の勇者だろ。だったらこんな所で諦めたらダメだろ。なあ、シンク」

声が聞こえた方を見るとそこには刀を握りしめ、真っ白なコートの上に騎士甲冑を装備し、空を飛ぶ真夜の姿があった。

「し、真夜？その格好は……それに空飛んでるし……」

真夜はゆっくりと魔物の背中に乗るとシンクに微笑んだ。

「姫さまは？」

「えっ、あ、姫さまはその首のところにある青白いパリアの中に……」

シンクが指さした方を見ると砕けたエクセリドが創りだしたパリ

アの中で眠っているミルヒ姫がいた。

「なるほどな。助けだそうにもあの魂魄が邪魔してるのか。それならアランから借りた刀と勇気の証である俺の相棒。『イルセリスハート』が勇者の邪魔をしている敵を……………全部なぎ倒そうか。」

『それなら私たちの名前を呼んでください。』

突然、折れた双剣から声が聞こえ、真夜が双剣を見つめると……………

『己自身に宿った力を開放し、この魔物を打ち倒そうとするお前に我らは力をやる』

「違うぜ。俺はこの魔物を倒すためにこの嫌っていた力を開放したんじゃない。俺にはこの魔物は助けを求めている気がするんだ。だからこそ……………この力……………魔法を使う。」

『良い答えです。もしも貴方がこの魔物を倒そうとしていたら、私たちの刃は復活はしません。私は貴方の心に光を』

『我はお前の魂に闇を……………』

『『聖剣と魔剣の力を開放します。さあ、呼んでください。我らを……………』』

「ああ、行くぜ、白姫改め聖剣ビオレ。紫姫改め魔剣ガイア！」

折れた聖剣の刃は見る見るうちに白く輝く刃に変わり、魔剣の刃は紫色の刃に変わった。

「シンクは姫さまを俺はお前を狙う魂を消し去る」

「分かった。」

シンクはミルヒ姫のところへ向かった。そんなシンクを狙う魂魄たちだったが……俺は双剣を構えた。

「ビスコッティの傭兵、綺羅木真夜改め、ビスコッティ魔導騎士。高町真夜と相棒のイルセリスハート。この世界のために俺はすべてを救う。」

第二十五話 双剣の真名（後書き）

六甲水「次回で決着が着きます」

真夜「というか、マジで俺魔導師だったの？」

六甲水「まあ、今まで使わなかった理由についてはあとあと明かす予定です。」

第二十六話 決着 光の宝剣（前書き）

お待たせしました。今回で魔物編終了です。次回辺りからは真夜の
話とコミックス版の日常話をやるつもりです。

第二十六話 決着 光の宝剣

双剣の真名を知り、真の姿を解放し、魔物に纏わり付く魂魄を薙ぎ払う真夜。魂魄を相手している間にシンクはミルヒ姫を救出へと向かった。

「姫さま。姫さま。駄目だ、姫さまを包み込んでるバリアのせいで声が届かない。」

「諦めるんじゃないねえ！声が届かないなら………届くまで呼びかける。」

俺は魂魄をある程度なぎ払い、シンクの元へと駆けつける。

「う、うん。やってみるよ。」

シンクは頷くと再びミルヒ姫に呼びかけた。するとまた現れた魂魄が俺達に襲いかかってきたが、

「聖剣ビオレ。悪しき魂を浄化せよ！『光破閃光斬』」

聖剣から放たれた白い光が魂魄を包み込むと、魂魄は全て浄化され、消えていった。

その頃、ミルヒ姫は映しだされた映像を見て、泣いていた。

「シンク。シンヤさん。」

『勇者と傭兵。あのままではいつかは力尽きてしまう。この子を救うには、この子に突き刺さった妖刀を破壊するしか……………』

「妖刀？」

ミルヒ姫が土地神に尋ねると、紅い刀に体を貫かれて苦しんでいる幼い土地神が姿を現した。

『この妖刀がこの子を苦しめ、あの様な悍ましい姿に変えたのです。そんな妖刀という魔を祓うためにはビスコッティの宝剣と傭兵が持つ聖剣と魔剣の力を使えば……………妖刀も破壊されます。ですが、この子自身も……………』

「……………ダメです。この幼い土地神を殺してしまうのは……………この子もあなたもこのフロニヤルドに住む者です。だから、私は……………
…あなた方を救います!」

突如、ミルヒ姫を包み込むバリアが破壊されると、裸のミルヒ姫と折られたエクセリードが出てきた。シンクは気絶したミルヒ姫を抱き抱えた。

「姫さま。」

「ん、シンク？私……………」

「よ、よかった。って、あっ、」

「えっ？」

シンクがミルヒ姫が裸だということに気がつくのと、ミルヒ姫も自分の姿に気が付く、お互い恥ずかしそうにしていた。

「お前ら、こんな状況で初々しいカップルみたいなことしてんじや

ねえよ。」

「じ、ごめん。真夜。」

「じ、ごめんなさい。シンヤさん。あの、そういえば、その姿は……」

ミルヒ姫が俺のバリアジェットを不思議そうに見ていた。俺はため息を付くと……

「今はその話をする暇はないだろ。それで、この魔物とやらをどうする？倒すか？」

「それしかないみたいだけど……」

「待ってください。この魔物は倒しちゃダメです。この子の体を蝕む妖刀のせいで……」

「妖刀？」

『マスター、あそこに突き刺さった妖刀が……』

『あれがすべての元凶』

突然、聖剣と魔剣から声が聞こえ、俺は魔物の頭の上に突き刺さった妖刀を見た。

「あれを破壊すればいいんだな。だったら……」

『その前に……』

『パラディオンとエクセリードを復活させます』

双剣からまばゆい光が出ると折られたエクセリードとミルヒ姫の指にはまったパラディオンがシンクのもとに戻ると、ミルヒ姫の前にピンクの刃の剣と鎧を……シンクの前にはオレンジ色の刃の剣が現れた。

「こ、これって……」

「エクセリード、私達に頑張れって……」

「初代様からも応援してくれてるみたいだぞ。」

『ビスコッティ領主、勇者。あなた方に浄化の力を……』

『マスター。お前にはその勇気の証に我らの新たな力を……』

『『悪しき者を救いし、剣を授けよう』』

聖剣と魔剣は突然浮かび上がると、二つの剣は一つに重なりあい、巨大な大剣に変わった。

「『聖魔剣 デイガイア』じゃあ、二人とも、一気に行くっぜ」

「うん」

二人は頷くと同時に無数の魂魄が現れた。俺たち三人は同時に剣を構えると、シンクとミルヒ姫はボードに乗りながら、一気に駆け抜け、俺は空を高く飛び上がった。

「行くぜ！お姉ちゃん直伝 星光の……………」

「ホーリー……………」

シンクとミルヒ姫は二つの剣を重ねて、魂魄の群れを一気になぎ払い、俺はディガイアに自分に宿る魔力を収束させた。

「殲滅斬！！」

「セイバー……………！！」

二つの閃光が魂魄が集まったものを打ち消すのであった。その瞬間、魔物の中に埋め込まれた妖刀が姿を現した。

「早く、あれを引き抜かないと……………」

シンクとミルヒ姫は同時に妖刀を引き抜くとそこから倒れた土地神が姿を現した。

「シンク！妖刀を投げろ！」

「えっ、あ、うん。」

シンクが抜き取った妖刀を透かさず上空に投げると、俺は妖刀に向かって砲撃を撃ち込んだ

「ディバインバスター！」

砲撃を撃ちこまれ、妖刀は碎け散った。

「な、何とか終わったみたいだな。」

シンクたちの元に戻る、ミルヒ姫は土地神を優しく抱き抱えていた。

「早くこの子の傷を……………」

「でも、どうやって？この魔物の抜け殻も崩れてきたし、」

「さすがに体力と魔力が全開だった二人を背負って飛んでいけるけど、今の状態じゃ、俺が飛べるだけでもやっとなしな。」

「どうやって脱出するか二人と考えているとどこからともなく声が聞こえてきた。その声は……」

「姫さま」

「シンヤさん」

声がかえった方を見るとそこにはハーランに乗ったりコとエクレの姿が見えた。そういえば、エクレっていつの間になくなってたんだらう？

「良かった。二人が来てくれたお陰で脱出できそうだ」

「よかったです。」

「とりあえず、俺は早く帰って寝たい。」

こうして巨大な魔物との戦いは幕を閉じた。その後、レオ閣下が魔物の出現に寄って動揺する国民たちに色々と事情を話、戦興行も魔物の出現で中止となったが、代わりにミルヒ姫のライブを行うこととなった。国の人達や兵士の人達は凄く楽しみにしていたが……

俺はミルと姫、レオ閣下、シンク、そしてリコとエクレレの五人に自分の事を話すのであった。

第二十六話 決着 光の宝剣（後書き）

次回は真夜の話となります。

第二十七話 勇気の証（前書き）

今回は真夜の能力についてミルと姫たちに話す話です。過去とかは番外編あたりで、

第二十七話 勇気の証

無事ミルヒ姫と土地神を救い、今は兵士のみんなが一生懸命ミルヒ姫のライヴの準備を行なっていた。そんな中、俺はリコと一緒に会場を見て回っていた。

「もう、シンヤさん。無茶しすぎであります。足の骨折れたまま戦うなんて……………」

「いや、あのままじっと見てるよりは、無理して戦ったほうがいいと思って……………」

リコは俺が足に怪我をしたまま、魔物と戦っていたことについて怒っていた。まあ、確かに『イルセリスハート』を使って空飛んだまま戦ってたけど、やっぱり無茶は無茶だよな。

「ごめんな。リコ。心配かけて……………今度リコが好きな物食べさせてやるから」

「そんな、食べ物で釣っても許しません。と言いたいですが、シンヤさんがそう言うならそれで許すであります。」

「本当か？リコは何が好きなんだ？」

俺がそう尋ねるとリコは笑顔で……………

「私は『ハチ蜜』がいいであります。あのほっぺたが落ちるほどの甘い『ハチ蜜』が食べたいであります。」

ハチ蜜つてあのハチミツかな？どこでとれるか分からないし、今度ミルヒ姫がエクレにでも聞いてみるか。

そんな事を考えながら、リコと一緒に歩いているとエクレがこっちにやってきた。

「やっと、見つけた。おい、シンヤ。姫さまとレオ閣下が呼んでいたぞ。」

「あの二人が？何の用だろう？」

呼ばれる覚えはないような気が……………とりあえず、行ってみるか。

俺とリコ、そしてエクレは一緒に宮殿へと向かうのであった。

ミルヒ姫が待っているという部屋にたどり着くとそこにはシンクと、ミルヒ姫、レオ閣下が待っていた。

「ようやく来たな。シンヤ。いや、タカマチ・シンヤ」

「……………」

その名前で呼ばれ、少し戸惑った。リコやエクレも、さらにはシンクも何の話か知らない。ミルヒ姫は多分レオ閣下から聞いたんだと思っけど、

「シンヤさん。もしよろしければ、貴方が自分の名前を隠していたことと貴方が言う『勇気の証』についてお話してもらえないでしょうか？」

「名前を隠してた？」

シンクはその部分にちょっと反応していた。なんとというかそのことはあんまり話したくないけど、あの力についてバラしちゃったからな。

「分かったよ。でも、全部は話せない。俺の出生については話したくないんだ。ただ名前を隠してたことと『勇気の証』については話すから」

「うむ、分かった。シンヤ」

レオ閣下とミルヒ姫が頷き、俺はその部屋にいる全員に名前を隠していた理由を話した。

「俺の本名は綺羅木真夜じゃなくって、高町真夜なんだ。まあ、別に隠すつもりはなかったんだけど、みんなと最初にあつた時、俺にはまだ『高町』を名乗る資格はなかった。」

「資格がなかったでありますか？」

「名前を名乗るのに資格とか無いだろう。」

リコとエクレがそんなことを言っていたが、俺はただ理由を話した。

「俺にだって思う所があるんだよ。『高町』家の人は俺のことを本当の家族だって思ってくれてたけど……俺には少し辛かった。本当の家族でもないのに……名乗っていいのか。」

「ま、待って、本当の家族じゃないって……どういふこと？」

「それは話せない。どうして知りたかったらシンク。元の世界に戻ったら海鳴市に行って高町って言う人の家を訪ねて、俺のことを聞いてこいよ。多分色々と事情がわかると思うから。」

「じ、事情がわかるって？」

正直、あの家の人達はこういつた別世界とかについて色々と理解できる人だからな。多分話しても分かると思う。

「話は戻す。名前を名乗っていいのか悩んでいたときに、『高町』家の……なのは姉ちゃんの娘さんが俺に言ったんだ。」

俺はその子のことを思い出した。その子も俺と同じ境遇の持ち主だ。その子に俺は自分の境遇について話してみた。すると……………

『名乗ってもいいと思うよ。だって、真夜お兄ちゃんはもうこの家の人だもん』

『だ、だけど、俺は……………』

『じゃあ、誰かのために戦おうと思ったら、その名前を名乗るようになったら？それが出来る頃には…………お兄ちゃんはもう高町家の住人だもん。』

オッドアイの少女はそう言いながら微笑んでくれた。誰かのために戦う。その時に高町を名乗る。

「まあ、それである時に決意して、高町を名乗ったんだけど、これ

が俺が本名を隠してた理由。」

隠していた理由について話すとミルヒ姫、エクレ、リコ、レオ閣下が何故か泣いていた。

「シンヤさん。苦勞していたんですね。」

「くっ、普段はおちゃらけているのに……………」

「シンヤさん。色々つらい過去があっただんでありますね。」

「苦勞をしていたのだな。」

そんなことを言われて、何だか少し戸惑ってきたよ。するとシンクは……………」

「真夜。とりあえず、次の話に移ろう。」

「そ、そうだな。」

シンクにそう言われ、とりあえず名前のことの話が終わらせると、俺はポケットに入れてあった『勇気の証』を五人に見せた。

「これはなのはお姉ちゃんから貰った俺の勇気の証『イルセリスハート』」

蒼い宝石を見せると、リコ達は目をキラキラさせていた。

「き、綺麗であります。」

「そ、そうですね。」

「あ、ああ、」

「これがお前の勇気の証と言っていたが、これにはどんな力が宿っているのだ？先ほどの戦いでお前の鎧が変わっていたが、」

「うーん、なんというか………フロニヤルドってフロニヤカって言うのがあるでしょ、それを変換して輝力に変えて、使う。俺の場合がちよっと違って、このイルセリスハートを使うと、体内にある輝力を使えることが出来るんだ。というか、説明が難しい。俺のこちの世界に来る前に説明されたばかりだしな。」

どう説明すればいいのか分からなくなってきた。すると、シンクはあることを言い出した。

「もしかして、大地からじゃなくなっって自分自身の体から使っているとかじゃないのかな？」

「おお、シンク。今日は何か冴えてるな」

「いや、それ何だかちよっと失礼な言い方だけど、フロニヤルドの人は大地から力をもらって、そのエネルギーを変換して使ってるんだよね。でも、真夜の場合は自分の体に宿った力を使える。そんな感じ？」

うん、シンクの解説は的を得ている。

「まあ、そんな感じで、イルセリスハートは、俺の力のサポートするものだって考えればいいよ。」

とりあえず、みんなに事情を話すのであった。そういえば、なのはお姉ちゃんあたりに連絡しといたほうが……でも、絶対に異世界にいるとか言ったら……怒られるよね。どうしよう。

そんな事を考えていると一緒に歩いていたりコが俺の顔を覗いてきた。

「どうしたのでありますか？シンヤさん。」

「あ、いや、なんというか……めちゃくちや高町の人達に心配かけてるんだらうなって、思って……とりあえず、連絡したいけど……シンクからまた借りるのは……」

「ああ、そういえば、戦が始まる前にタツマキがシンヤさんの荷物を持ってきたでありますよ」

タツマキって確か、シンクが召喚するきっかけを使った隠密部隊の……犬。というかよく俺の部屋から持ち出せたな。

「それじゃあ、俺、ちょっと連絡してくるから、リコはみんなとラ

イヴに行っておいてよ。後で合流するから」

「分かったであります。」

俺は急いで、タツマキがいる場所、ユツキー達が住んでいる小屋へと向かうのであった。

第二十七話 勇気の証（後書き）

レオ閣下とダルキアンの活躍をカットしたのは、真夜の力があつたからという理由です。次回でついにあのキャラの登場です。

とりあえず、過去話については前書きで伝えたように番外編で、シクとベッキーあたりに行かせます。

第二十八話 お姉ちゃんと幼馴染に連絡を……（前書き）

ついにあのキャラの登場です。さらには新作のオリキャラが登場する予定です。

真夜「またかよ。」

陽「というか、なんでまた」

いや、だって前からやりたかったけど、色々と話しが浮かばなかったから……とりあえず11月くらいには上げる予定だけど、

第二十八話 お姉ちゃんと幼馴染に連絡を……

風月庵

そこはユキカゼとダルキアンが住んでいる場所であった。ダルキアンとユキカゼはミルヒ姫に保護された土地神の面倒を見ていた。

「ふむ、戦場で感じた魔の気配は傭兵殿が食い止めたみたいでござるな。」

「そうでございますね。お館様。まさかシンヤ殿にも我らと同じ魔を断つ力を持っているとは……………」

「とはいえ、私達の場合はあの妖刀を完全に破壊する事が出来なかったが、彼はアレを完全に滅した。ふむ、今度私達と一緒に旅に行かせてみるか。」

ダルキアンも真夜が使った力に少しか興味があった。もし、一緒にいくことが出来ればその時は色々と剣術なども仕込んであげられるとも思っていたのだが、

「駄目ですよ。お館様。そのようなことをしたらリコが寂しがるでござる。」

「ははっ、そういえば、傭兵殿には想い人がいたな。だったら、一緒に連れていくか」

「それはいいアイディアでござる。」

二人がそんな事を話していると、そこに真夜がやってきた。

「ユツキー、ダルキアンさん。」

「おや、噂をすればなんとやらでござるな」

「何の話ですか？」

「ところでシンヤ殿はこんな所に来てどうしたでござるか？ 普通ならリコと一緒にいるはずでござるが、」

「ああ、ちよつと何かタツマキから俺の荷物預かってない？」

「荷物？ ちよつと待ってるでござるよ。」

ユツキーがそう言いながら、土地神を抱きながら小屋の中に入っていった。とりあえずユツキーが戻ってくるまでどうしてよう。

「時に、傭兵殿。」

何しようか悩んでいるとダルキアンさんが話しかけてきた。なんだろっ？

「何ですか？ ダルキアンさん。」

「いや何、今回の魔物との戦い。ご苦労であったな。まさかあの妖刀まで破壊するとはな。」

「ああ、なんとというかアレは破壊しなきゃいけないと思って……」

「そうか、本来ならああいう仕事は我らがやるべきことであつたが、今回はかりはお前に任せてしまつてスマヌな。」

ダルキアンさんはそう言いながら、俺に向かつて一礼をしてきた。何だかそんなことされるとちよつと……

「あ、あの、俺も今回の事がきつかけで色々と吹っ切れたから……」

「ほう、色々とな。まあ詳しい話は後々聞こう。」

ダルキアンさんがそう言い切ると同時にユツキーが俺のリュックを持って戻つてきた。

「シンヤ殿。これでござるな。」

「ああ、そうそう。」

ユツキーからリュックを受け取り、中身を見てみると中には非常時に入れておいた洋服といつも使っている携帯電話が入っていた。それと一枚の紙が……

「なんだろう？この紙？」

俺は紙に書かれていた文字を読んでみた。そこにはこんな事が書かれていた。

『この手紙を見たら、大至急連絡すること byなのは』

やばい、お姉ちゃん。思いっきり心配してるし……とりあえず、

急いで連絡をしに………

とりあえず元の世界と連絡をとるために祭壇に訪れた俺だが………
もう一人来ていた。

「えっと、ノワールだっけ。何でここに？」

そこにはジェノワーズの一人の黒髪の女の子で、リコと大親友のノワールがいた。とりあえず、何でいるか理由を聞いてみると、

「リコに頼まれて、機材を運びにきた。連絡するなら必要だと思っ
て………」

「あ、ああ、ありがとうな。ノワール」

「それと、私のことはノワでいい。そっちのほうがいいから」

「あ、うん。」

何だかこの子は表情が少なくてちょっと苦手なんだよな。というかノワみたいな大人しい子とリコみたいな元気な子がよく仲良くなつたよな。性格とか正反対だと思うのに……………

「連絡しないの？」

色々と考えていると、本来の目的を思い出した。そうだ、お姉ちゃんに連絡を…………… とりあえずお姉ちゃんの携帯に……………

お姉ちゃんの番号に電話をかけて、しばらくコール音がすると…………… 出た。

『真夜！？いまどこにいるの！』

「あ、えっと、なのはお姉ちゃん？」

やばいもしもしかさういうのがない。これは怒ってるよね。

『お母さんたちから、真夜がいないって連絡があって私も今、仕事休んで探してるんだけど…………… したら家に変な犬が来て…………… とりあえずリュックと携帯と手紙渡しておいたけど…………… 連絡するのが遅いよ！』

「ご、ごめん。ちょっと色々あって……………」

『色々って？近所の陽くんと夕ちゃんも行方不明って話だから……
…近所の人達が何かの事件に巻き込まれてるんじゃないかって言っ
てたよ。』

そういえば、陽もこの間連絡したけど……まさか俺みたいに別世
界に行つてたりして……でも、夕もって……幼なじみ三人組、
まさかの別世界行きだったりして……まさかね。

「え、えつと、別におかしな事件に巻き込まれてるわけじゃないけ
ど……おかしな事には巻き込まれてるかな。」

『おかしな事？とりあえず、迎えに行くから、今どこにいるの？』

「えっ、フロニヤルドのビスコッティ。」

『フロニヤルド？ビスコッティ？もう変なこと言つて、行き先教え
ない気でしよう。』

ですよ。普通ならそう言つよね。でも俺は……

「お姉ちゃんの仕事ってそう言つた不思議な世界に行つたりするこ
とでしょ、だったら分かると思つただけど……」

『どづいこと？』

「実は……」

俺はこの世界に来た経緯とこの世界で何が起つたかについて、話
した。それに俺が高町を名乗ると決意したことも……

話を終えらるとなのはお姉ちゃんは……

『輝力。魔物。双剣と宝剣。真夜って私に似なくていい所が似ちゃったね。無茶ばかりして……』

「ごめん。でも、俺は……今いる世界で自分が何をやるべきかって知ったんだ。だから……」

『分かってるよ。真夜がやるべきことを知ったって分かったから、それに無事なんですよ。』

「うん、足が折れたりしたけど、お姉ちゃんがイルセリスハートが治癒してくれたから大丈夫。」

『そっか、とりあえずお母さんたちに言っておくから、』

「ああ、出来れば伝言を伝えておいてほしいな。」

『何？』

「心配かけてごめんなさい。お父さん、お母さん。それと多分近い内に友達が来るかもしれないから……」

『うん、分かったよ。私も真夜がいる場所が分かったら、直ぐに迎えに行くから……』

なのはお姉ちゃんはそう言い残して、電話を切った。とりあえずちよっと怒られたけど、すんごい心配してるってことも分かったからいつか。

電話を終えるとノワが嬉しそうにしていた。

「……………連絡取れたんだ。」

「ああ、何とか……………」

「ところで夕つて？元の世界に残した彼女だったら……………リコの代わりに引っぱたくけど……………」

えっ、何？まさかの親友を傷つけたからその代わりにぶちますって話。

「いや、違うから。夕はただの幼なじみ。俺はリコー筋だから……………」

……………」

「ならいいけど、」

ノワはそう言いながら、あげた手を引つ込めた。本気で殴る気だったのか。そういえば、陽と夕が行方不明って……………とりあえず、電話してみるか。

最初に陽に電話をかけてみると……

「もしもし、陽？」

『おつ、また珍しく電話かけてきたな。』

「お前、行方不明って聞いたけど、まさか……変な世界に来てたりするのかな？」

とりあえず直球で聞いてみると、陽はしばらく黙りこむと答えた。

『まあ、変な世界にきていると言うか……そんな感じだな。お転婆姫さまが国を発展させようと頑張ってる世界にいるけど……まさか、お前も？』

「まあ、似たような感じ。」

陽は俺と同じ力を持っている。でも、あいつは俺と違って親には気味がわられていない。ぶつちやけ、その力も陽の才能だと言ってたけど……ちなみに陽はデバイスを持っていないからあんまり扱えない。

とりあえず、俺も別世界に居ることを教え、頑張れば帰れるかもしれないと伝えた。

『そっか、俺たち何だか似ているな。力も今の状況も』

「そうだな。そういえば、夕も行方不明って聞いたけど、知ってるか？」

『いや、というか、俺と真夜はすごい力持ってるからこういいう別世界に来てるっていうのはわかるけど、アイツは特にそついうのはないだろ』

「確かに、アイツの場合は普通の人だからな。」

とりあえず、次に夕にでも連絡してみるか。

陽との電話を切り、今度は最後の幼なじみ、夕に連絡を取った。しばらくコールがなると……………

『もしもし?』

「夕。何、お前も行方不明になってるんだよ。」

『開口一番でそれって……………というかお前も?』

「ああ、俺と陽も似たようなもんだよ。」

『いやー、私ね。今おかしな世界に来てるんだけど……………ちょっと凄い力身につけちゃったみたい。』

まさかの一般人だった夕までも魔法とかの力を……………本当に何なんだよ俺たちは……………

「すごい力って?」

『女神になれる力だよ。今いる世界に来た瞬間に何か身に付けちゃったみたい。』

何か俺と陽を軽く超えてませんか？ていうか女神ってどんな世界にいるんだよ。

「一応聞くけど、何ていう世界にいるんだ？」

『ゲームギョウ界！！』

どんな世界だよ。というか明らかにゲーム業界って聞こえたぞ。俺の聞き間違えか？心のなかで突っ込みを入れて……電話越しから声が聞こえた。

『ちよっと、夕。どこに行ってたのよ』

『キラーマシンをどうするかって大変な時に電話なんて……』

『二人とも落ち着いて、夕ちゃん。誰と話してるの？』

『幼なじみだよ。』

えっ、何？キラーマシンって、何？ドクエ？あいつ、本当にどこにいるんだよ。

『ごめんね。今から色々とやらなきゃいけないことがあるから……
また後で連絡する。』

そう言い残して夕は電話を切った。というか、幼なじみ全員異世界に行くなんて……どんな状況だよ。

とりあえず、色々と連絡を取り終わる頃には、既に姫さまのライブが始まっていた。ノワも気がついていたらいないし………とりあえず、俺もライブ見に行くか。

そう思いコンサート会場に向かう途中、リコが木にもたれかかって泣いていた。

「リコ、どうしたんだ？」

「あっ、シンヤさん。ご家族には連絡は取れたのでありますか？」

「うん、一応は………それで何で泣いてるんだ？何かあったのか？」

俺がそう聞くとリコは直ぐに涙を拭いて、笑顔でこうやってきた。

「だ、大丈夫であります。まだ確信を得ていない状態で……………その、」

「まあ、今は聞かない。今は姫さまのライブを見ようぜ」

「は、はいであります。」

こうして、ビスコッティとガレットのいざこざや俺が持つ双剣についての問題は全て片付いた。双剣も今はイルセリスハートの中に眠ってるし、大丈夫だと思うけど……………ただ俺にはリコが泣いてた理由はこの時分からなかった。ただ、今もライトに照らされるリコの顔は……………悲しそうだった。

第二十八話 お姉ちゃんと幼馴染に連絡を……（後書き）

今回はコミックスでやっていた八子蜜取りをやる予定です。その後
にシンクが元の世界に変えるまでの話をやり、その後なのはが迎え
に来る話を……

第二十九話 八チミツ？八チ蜜？（前書き）

今回はコミックス版の話をするつもりです。真夜の真の力解放済みなので、色々頑張ったりします。

第二十九話 八チミツ？八チ蜜？

魔物との戦い、そしてミルヒ姫のコンサートの数日後のこと、リコはここ数日図書館に籠もりつきりで急がしそうにしていた。俺もあんまり会うことが出来なかった。そんなある日のこと。

「八チミツ採り？急だな。」

部屋でのんびりしていると、突然シンクとエクレが訪ねてきてそんなことを言ってきた。シンクはノリノリだけど、エクレはちょっと乗り気ではなかった。

「このバカ勇者がいきなりそんなことを言い出してな。私もしようがなく行くことになったんだ。」

そんなことを言いつつ、エクレの尻尾は凄く揺れていた。何？エクレって八チミツ好きなのか？

「俺は別にいいけど……なあ、エクレ。この国の八チミツってそんなにおいしいのか？」

「ああ、八チ蜜はみんな好きだからな。リコも好きだぞ。」

リコのことは聞いていないのに、リコの事を出されたぞ。まあいいか。とりあえず先に行っているガウルとユッキー、ジェノワーズ達と合流するために、三人で八チミツが採れる八チエスタ森林へと向かうのであった。

八チエスタ森林

三人でセルクルに乗ってたどり着いた先には大きな森が広がっていた。確かにここなら蜂とかいそうだな。

「おお、シンク、シンヤ。ようやく来やがったな。」

「遅れてごめん。ガウル」

「それにしても何か荷馬車とかあるし、みんな武器とか持ってるけど………八チミツ採りってそんなに大変なのか？」

そういえば、エクレも武器しっかり持ってるみたいだし、もしかし

てフロニヤルドの蜂ってすごい巨大だったりとか……

「それじゃあ、みんな行くぜー!!」

ガウルの呼びかけにみんなが答えるけど、何だか嫌な予感がしてならない。

それからしばらく行った先に俺たちはとんでもないものと遭遇した。それは……

『ガルルル（なんやわれ？）』

目の前に現れたのは巨大な熊だった。というか……まさか……

「ねえ、エクレ、ユッキー。この巨大な熊って……」

シンクがエクレとユッキーの二人にそんなことを聞くと二人は……

「何っってお前……」

「これが『ハチエスター黒熊』にござるよ。この熊は蜜花や果物から摂取した蜜を体内溜め込むにござるよ。その蜜は体内で熟成されるからそこからとりだされる『ハチエスター黒熊の蜜』略してハチ蜜にござるよ。」

「何か色々とおかしいよね。それー!!」

俺とシンクが同時にツッコミを入れるのであった。というか普通は虫から取るんじゃないのかな？そんなことを思っていると、ガウルとユッキーが熊と交渉してるみたいだけど、ダメだったみたいで、今度は何か熊と決闘することに………だけど、何かさっきまで一匹だったはずなのに大量に出てきたけど、ジェノワーズの人達が言うには普通は2〜3匹くらいだったらしいけど、出くわしたのは大家族だったみたい。

「よし、シンク。シンヤ。やるぞ!!」

はあ、何かもう色々とツッコミを入れるのが阿呆らしくなった。とりあえず、俺はイルセリスハートを取り出した。

「セットアップ。イルセリスハート」

俺は騎士甲冑に着替え、右手には聖魔剣デイガイアを、左手にはお姉ちゃんが持つ杖に似た槍を装備した。

「凄いよ。真夜。何か新しい武器もついでるし、」

「それがお前の新しい力か。へっ、今度一戦やろうぜ!」

そういえばあの時は出さなかったからな。というかあの時初めてイルセリスハートを使ったから、まだあんまり使い方が分かってなかったりするけど………

「とりあえず、あの熊どもをやっつければいいんだな。」

俺はイルセリスハートとデイガイアを構え、イルセリスハートの先

端に魔力刃を展開させ、何匹かのハチクマを斬りつけると、見事にハチクマはダメ化した。さらに何匹かのハチクマが襲いかかってくると俺は……………

「輝力開放！狼破殲滅斬！」

狼の姿をした輝力が何匹か現れると襲ってきたハチクマを切り裂くと、さらにダメ化した。

「この程度なら楽だな。」

俺の戦いを見て、驚くガウルとシンク達。

「す、すげえな。俺だって負けてらんないぜ！」

ガウルはそう言って紋章術を展開させ、ガウルの両腕に巨大な輝力の爪が現れた。

「獅子王爪牙・爆雷切り！」

「ユキカゼ式忍術 閃華烈風！」

「裂空一（十）文字！」

さらにジェノワーズ、ユツキー、シンク、エクレも負け時と紋章術を使ってハチクマを一掃するのだが、シンクとエクレが指揮官らしきクマを倒して喜んでいたガウルであったが、突然吹き飛ばされた。

「ガウル！てか、あれって？」

「ああ、ガウ様が……」

「母グマや、子供たちのピンチにやってきたんや」

ベール、ジョーヌの二人がそんなことを言っていた気がするけど、それにしても、ガウルを一撃って……強すぎだろ。

『ガLLLLLLLL（あんたら、うちの息子になにしとんのや）』

母グマはそう言いながら、何か輝力砲をだそうとしていた。

『ガLLLLLLLL（ハチクマ神拳熊破翔爪拳！！）』

「まずい、全員全力防御！」

エクレがそう言った瞬間、母グマから放たれた輝力砲が全員に向かって直撃した。俺は何とか空に飛んで避けたけど、全員大丈夫かな？

土煙が晴れるとみんなそこまで怪我はしてないけど……エクレ達女子グループはみんなして防具が剥がされ、裸に……

「大丈夫か？」

「こら、シンヤ。お前だけ空に逃げるのはずるいぞ！」

「せめて私たちも助けて欲しかったでござる」

エクレとユツキーの二人に怒られた。いや、だって、魔導師として空飛ぶのは当然だし……そういえば、シンクは？

「いてて、何とか防御成功」

シンクは盾を召喚して攻撃を防いでいた。それを見て母グマは何か挑発してるけど……

「シンク！勝負を挑まれているでござるよ。」

「分かった。母グマさん。一騎打ちをお願いします。真夜も手を出さないでね。」

「了解。俺は吹き飛ばされたガウルでも探してるよ。」

俺はそう言ってガウルが吹き飛ばされた場所まで向かうのであった。

しばらく空を飛んでガウルを探していると上半身裸のガウルがいた。

「おゝい、ガウル。大丈夫か？」

「ててっ、シンヤか。くそ、あの熊公め。待つてるよ！」

ガウルはそう言って、直ぐに立ち上がってシンクたちがいる場所まで向かっていった。何かもうアイツらに任せていいかな。のんびり戻っていくか

のんびりシンクたちの所に戻ると何故かミルヒ姫やレオ閣下。ダルクアンさんまでいるし、さっきまでいた熊もいなくなってた。

「何かもう終わったみたいだな。」

「シンヤ。お前、私達が大変だったというのに……………キサマはのんびりと空を飛びおって……………」

「いや、もうシンクに任せていいかなって……………」

怒っているエクレに対してそう返すとエクレはまた怒り出しそうだ

った。するとダルキアンさんが……

「ふむ、それがシンヤ殿の甲冑でござるか。よいでござるな」

「うん、ありがとうな。そういえば、ガウルは？」

ガウルの姿を探していると何かガウルはレオ閣下にしばかれていた。あいつも色々と大変だな。

こうしてみんなで八手蜜採りが終わり、その後城へ帰ってみんなでティータイムとなったのだった。

そしてその夜。俺は図書館へと訪れた。ここにきた理由は……

「リコ。あんまり根を詰めすぎるな」

「あ、シンヤさん。大丈夫です。もう少し調べ終わったら寝るであります。」

リコはそう言ってまた調べごとを始めた。リコって色々と頑固な所あるからな。こういう時は……

「えいっ」

「あつ、」

俺はリコが見ていた本と何かの書類を取り上げた。

「ちょ、シンヤさん。」

「たくつ、ちゃんと寝ないとダメだろ。一体何を……………」

俺はこの世界の文字は何とか読めるようになったから、書類に書かれていた文字を読むとそこには……………

「……………これって……………」

「し、シンヤさん。その、実は……………」

そこに書かれていたのは勇者送還に関することであった。でも、これって……………

第二十九話 八チミツ？八チ蜜？（後書き）

次回、帰還編が始まります。

第三十話 4つの条件（前書き）

さて、今回から最終章になります。今回の話は4つの条件とシンクが城での式を終わらせるところまでです。

第三十話 4つの条件

俺とリコはシンクの部屋に訪れた。シンクはまだ眠っていないかった。

「どうしたの？二人とも？いきなり訪ねてきて」

「悪いな。こんな時間に訪ねて……………」

「実は…………勇者様。勇者様の帰還する方法が分かりました。」

そう俺たちはシンクに帰還するための方法が分かったことを伝えに
来た。シンクは帰還できるということを知ると嬉しそうにしていた。

「そっか、帰れる方法が分かったんだ。よかった。……………と聞いた
いことだけど、わざわざ二人がこうして訪ねてきたのって……………やつ
ぱりなにか理由でも？」

「はいであります。帰るために4つの条件があります。」

「4つの？」

リコはシンクに帰還するための条件を話した。一つ「儀式は勇者を
召喚した者が行う」二つ「儀式は勇者を召喚してから16日以内
に行わなければならない」三つ「勇者はフロニヤルドで得た物を元の
世界に持ち帰る事は出来ない」そして4つ「一度送還された勇者は
二度とフロニヤルドに来る事は出来ない」これが帰還する条件。リ
コはコンサートの時に知ったらしいけど……………あまりの条件に泣いて
いたらしい。

「記憶もか。そういえば真夜はどうするの？一緒に帰れるんじゃないか？」

「俺は別に勇者じゃないからな。それは勇者送還の儀だし、俺は……」

俺の場合、お姉ちゃんが迎えに来るって言ってたけど、出来れば……

「俺の召喚者はリコだからな。リコに帰してもらおう……」

「シンヤさん。」

リコは泣きながら見つめていた。俺はそんなリコの頭をそっと撫でた。

「なあ、シンク。俺はこの世界の人間じゃないから、帰っても忘れることないと思うけど、あの時言ったこと覚えてるか？」

「あの時って、真夜の過去について知りたかったら、海鳴市って言う所に行行って話だっけ？」

「そう、まあ覚えてたらだけだな。」

「うん、分かった。絶対に聞きに行くから」

シンクはそう笑顔で言うのであった。

その後、俺とリコはシンクの部屋を後にするのであった。リコはと

いごと……

「シンヤさん。さっきの私に帰してもらって……」

「ん、俺もいつかは帰らなきゃいけないと思ってる。まだあつちには大切な家族もいるし、色々と話さなきゃいけないこともあるけど………リコ。」

「何でありますか？」

「お前は俺を帰すための装置を作る時に、自由に行き来できるようなもの作ってくれよな。いつかは………その、け、結婚とか………したいし……」

俺はずっとリコに言いたかったことを言うと、リコは顔を真赤にさせていた。

「は、はひ。け、結婚でございますか？そ、それはその………」

「ほ、ほら、何か………リコの事をずっと守りたいって思ってるから………」

「え、えつと、」

とりあえず、お互い顔を真赤にさせながら夜は終わりを告げるのであった。

それから日が立ち、シンクは今までお世話になった人達に挨拶へと回っていた。リコもその条件なしでどうにか帰す方法を探している。俺は……………

「そうだな。いつか別れる日があるんだよな。」

『帰るのが嫌なのですか？』

ふっと頭の中にビオレの声が聞こえた。

「まあな。リコにあんなコト言ったけど、俺的にはずっとリコの側にいたいと思ってる。だけど…………俺もいつか帰らないと……………」

『ふむ、そうだな。お前は…………迷いを振り切ったが、また迷いが出てきておるな。』

「俺だって人間だ。誰だって悩んだりする。だから……………」

俺は夜空に浮かぶ無数の星を見上げた。その空はとても綺麗で…………絶対に忘れてはいけなと思った。

シンク帰還の日、シンクはビスコッティで帰還式をやっている中、俺は………祭壇へ来ていた。

「今頃、シンクのやつ。頑張ってるんだろっな。」

第三十話 4つの条件（後書き）

次回でシンク帰還します。ちなみにまだ最終回ではありません。

第三十一話 また会う日まで（前書き）

今回でシンクは帰ります。次回辺りになのはさんが登場です。

第三十一話 また会う日まで

しばらく祭壇で待っていると、シンクとミルヒ姫がやってきた。

「よっ、シンク。」

「真夜。何で城にいなかったんだよ。」

「俺はああいうのは苦手なんだよ。ミルヒ姫。ちょっとこいつと話していいかな？」

「はい。大丈夫です。」

ミルヒ姫はそう言って、一旦祭壇から降りていくのであった。残された俺とシンクは……

「あの約束は絶対を守るけど、幼なじみも一緒に連れてていいかな？」

「別にいいけど、そういえば、お前、何かみんなに色々と物渡してたりしたんだって、そんなことしたらみんな、お前が帰れないって気が付くと思うぞ」

「あはは、やっぱりそうかな？エクレはちょっと気づいてたみたいだけど、」

「あいつは意外と勘がいいからな。」

お互いそんな感じで話していると……俺はシンクに握手を求めた。

「シンク、俺も元の世界に帰れたら、一緒に遊ぼうぜ。俺も幼馴染連れて行くから」

「僕もだよ。友達と一緒に行くから」

シンクと握手を交わすと、俺はそのままシンク別れを告げた。

「ミルヒ姫。もう大丈夫ですよ。」

「はい、シンヤさんもシンクとしっかり挨拶できたのですね。」

「ああ、まあな。」

「それじゃあ、行きますね。」

俺はミルヒ姫と別れ、祭壇を後にし、城へと戻るのであった。

「こうして勇者は元の世界へと帰るのであった。」

それからまた数日が経ったある日、とりあえず俺は図書館の片付けをしているリコのところにも行くとするか。

そう思いながら図書館を訪れると、リコが何故か慌ただしく走りながらすれ違った。

「何かあったのかな？」

「あつ、シンヤ。」

「ノワ。何かあったのか？」

図書館に残っていたノワにリコの様子がおかしいことを聞くと、ノワは一枚の手紙を見せた。それは、シンクがまた来ることが出来ることだった。

「これは……………、最初の帰還から再召喚までは91日以上空ける。『召喚主以外の3名以上に、また来るといふ誓約と共に勇者の身に着けていた物（内容は問わないが、勇者が元の世界から持ち込んだ物がよい）を預けておく。』召喚主に対しては、勇者と召喚主の名前が書かれた約束の書と誓約の品を渡しておく。これって……………」

「うん、シンクが戻ってくる。」

「そっか。」

俺は元の世界にいるシンクの姿を思い出した。またあいつも戻ってくるんだな。

地球

「きつとまた行くからね。姫さま。真夜。あつ、そうだ。ねえ、ベツキー」

「ん？何？」

シンクと幼馴染のベツキーは公園のベンチに座りながら紅茶を飲んでた。すると、シンクはあることを思い出した。

「実はさ、外国に行ってた間に知り合った友達に頼まれたんだけど、今度の休みに海鳴市に行かない？」

「海鳴市？ここからそんな離れた場所じゃないけど、別にいいわよ。でも、何頼まれたのよ。」

「うん、ちょっと話をね。」

それから十日の月日が経った。シンクが戻ってくるということが分かり、ビスコッティのみんなは一安心。エクレも何だか帰ってくるのが楽しみであった。俺とリコはというと……風月庵で一緒に俺が元の世界に帰るための装置を作っていた。

「シンヤさん。その道具を取ってくださいであります。」

「これか？」

「はいであります。」

「それにしても、これで帰れるのか？」

「ううん、なんというかシンヤさんがいた世界にちゃんと送れるかどうか凄く心配なのであります。こういうのに詳しい人がいれば……」

確かに次元を超えるとかそういうのはミルと姫が使う紋章術とかが必要だけど……こういった装置を作ったりするのは……やっぱり難しいよね。

「シンヤ殿。リコ。ちょっと休憩するでいいえ。」

「わかったであります。」

「んじゃ、ちょっと休憩するか。」

「はい」

とりあえず、俺はこんなふうと一緒にフロニヤルドの世界を楽しむのであった。

だが、それもとある来訪者によって打ち破られた。その来訪者突然フィリアンド城に来ていた。

「あの、姫さま。お客様が……」

メイドの一人がミルヒ姫に言うと、ミルヒ姫は最初、レオ閣下かと思っていたのだが、

「お通ししてください。」

そう言つて、謁見室にやってきたのは二人の女性だった。一人は金髪の女性。もう一人は栗色のサイドテールの女性。

「初めまして、私、フェイト・ハラオンといいます」

「私は高町なのはといいます」

「高町？もしかして……」

ミルヒ姫は高町という名前に聞き覚えがあつた。それは……真夜
の関係者だ。

「はい、高町真夜を迎えに来ました。」

第三十一話 また会う日まで（後書き）

次回は真夜がりコの事をなのはに紹介したりします。頑張り、真夜

第三十二話 帰ろう！帰りたくない。（前書き）

今回は真夜vsなのはがはじまります。次の次辺りで最終話となりますが、番外編で真夜の過去をやったり、ドラマCDの話をするので、まだまだ続きます。何話ぐらい続くのでしょうか？多分今まで最長のとあるのはを超えたりは………しないでしょね。

第三十二話 帰ろう！帰りたくない。

風月庵で、休憩中の俺とリコ。さらにはユッキーと助けた土地神も一緒に混ざっていた。

「どうでござるか？シンヤ殿が帰るための装置作りは？」

ユッキーがお茶菓子を食べながら聞いてきた。そういえば、ダルキアンさんは今城に行ってるんだっけ。

「うーん、形にはなっただけど、まだどういう風に転送させるかとか出来てないから……」

「そういうのに詳しい人がいればいいのですが、さすがにいませんね。」

「シンヤ殿はそういったことには？」

「俺も分からないよ。こっちに来るまでちょっと変わった力をつける一般人だったんだから」

「こういう時になのはお姉ちゃんとかが来てくれればいいんだけど……そう都合よく来るわけは……」

そんなことを思いながらお茶を啜っていると、慌ただしそうにエクレがセルクルに乗ってやってきた。

「シンヤ。こんな所にいたのか。」

「どうしたんだ？エクレ？そんなに慌てて………というか訓練は？」

「そんなことは今はどうでもいい。」

あのエクレが訓練をどうでもいいって………これはまさか………また魔物でも出たのか？

「とりあえず、城へ戻れ。姫さまが呼んでいる。」

「分かった。リコ、ユツキーも行くか？」

「はいであります。エクレがこんな風に慌てているのはきつと良からぬことが遭ったということでもあります。」

「拙者も、向かうでござるよ。」

とりあえずみんなでセルクルに乗って城へと戻るのであった。だが、これがリコとのちょっとしたお別れになるとは思っていなかった。

城へたどり着くと、ミルヒ姫がいる部屋に入る俺達であったが……
…俺はそこでとんでもないものを見てしまった。

「あつ、来てみたいですね。」

ミルヒ姫は二人の女性と楽しそうに話していたが、その女性とは……

「やっと逢えたね。真夜」

「迎えに来たよ。真夜」

俺の名前を呼ぶ女性。それは……姉であるのはお姉ちゃんとその
友達のフェイトさんだった。

「な、なのはお姉ちゃん。それにフェイトさんまで………なんで？」

「「お姉ちゃん？」」

リコとユツキーが同時に驚いていた。まさかこんなに早く迎えに来
るとは………

「なんでって、迎えに行くって行ったでしょ。もう少し喜んだら？」

なのはお姉ちゃんが笑顔でそう言うけど、その笑顔、結構怖いよ。
お姉ちゃん。

「よかったですね。シンヤさん。お迎えの人が来てくれて」

ミルヒ姫もそう言うけど、その『迎え』という言葉は何か怖い感じ
に聞こえて嫌だよ。それに、俺はまだお姉ちゃんたちと帰るわけに

は……

「ご、ごめん。お姉ちゃん。折角迎えに来てくれたのは嬉しいけど、俺はまだ帰るわけには……」

「どづいづいと？」

「俺はこの子と約束したんだよ。この子が作った装置で帰るって……」

俺はそう言っつて、リコの方を向いて言っつた。リコはペコリとお姉ちゃんに挨拶すると、こんな事を言っつてきた。

「あの、私リコッタ・エルマールというであります。」

「高町なのはです。」

「フェイト・T・ハラオンです。もしかして真夜のお友達？」

「いえ、恋人です。あつ、でも、今は……その、結婚の約束をしたので……婚約者であります。」

リコ、そのことはまだ言っつのは……と止めようとしたが、その場にいた全員が顔を真赤にさせていた。

「シンヤさん。もう既にリコとそこまで……」

「き、キサマ、リコをたぶらかしおっつて」

「おお、いつ式典でござるか？これは国中をあげて……」

「し、真夜。それはさすがにまだ早いよ。」

「そ、そうだよ。私達だつてまだ……………」

何か話が大きくなりそうだけど……………とりあえず俺はまだお姉ちゃんたちと帰らない。ちゃんとそう言おう。

「そ、そういうわけだから、俺はまだお姉ちゃんたちと帰れないから……………」

「駄目だよ。お母さんたちが凄く心配してるのに、そういう風に我侷言つて……………真夜は私達と一緒に帰るの。」

「やだ。」

「駄目」

お互い意見を譲らなかった。なのはお姉ちゃんてリコと一緒に色々頑固な所あるし……………

「そんなにわがまま言うなら……………」

ふつとなのはお姉ちゃんは突然バリアジャケットを装備すると、レイジングハートを向けてきた。

「力づくで連れて帰ります。」

「嫌だつていつてるでしょ、だから……………」

俺もセルイリスハートを取り出し、甲冑姿に変わって、デイガイアを構えた。

「認めさせるために、お姉ちゃんを倒す。」

二人の間に緊迫した空気が流れた。するとフェイトさんが慌てて止めに入った。

「もう、こんな所で喧嘩しようとしないでよ。二人とも、姫さまたちだって困ってるでしょ。」

フェイトさんにそう言われて、見るとたしかにリコ達はどうするか悩んでいた。そんな中ミルヒ姫は何か考え事をしていて。何か嫌な予感が…………

「あの、なのはさん。ここは私ミルヒオーレに任せてもらえないでしょうか?」

「えっ?」

ミルヒ姫のとある思いつきの準備をしている時、リコはフェイトと話していた。

「あの、フェイトさん。」

「ん？えっと、リコッタだけ。どうしたの？」

「あの、実はちょっと知恵を貸してもらえないでありますか？」

「知恵？」

リコが何かしようとしていた。それは……………

そして数時間後、ビスコッティの訓練場で何故か俺となのはお姉ちゃん
は観客包まれながらスタジアムの中にいた。

『ビスコッティ&ガレットの皆様。お待たせしました。只今より傭
兵 高町真夜vsその姉 高町なのは殿の試合が始まります。』

「って、どういふ状況だよ。これ！」

思わずツツコミを入れてしまう。俺であった。もしかしてミルヒ姫が考えてたことって……

「ねえ、真夜？これはどういふことなの？」

「ああ、なんとというかこの世界は平和的に戦をして国を盛り上げようって感じなんだよ。平和的だから誰も死んだりしないしね。」

「へえ、こんな世界があるんだ。」

なのはお姉ちゃんとそんなことを話していると、ナレーターの人がルール説明に入った。

『ルールを説明します。ルールは簡単、相手に敗北宣言をさせるか、もしくは相手の武器を奪い取り、攻撃不能にするかです。』

「なるほどね。じゃあ、久しぶりに見てあげるよ。真夜がどこまで成長したか。」

「いいよ。今回は絶対にお姉ちゃんに勝つ。」

『ちなみに今回はゲストとして、ガレット領主 レオンミシエリ閣下とミルヒオーレ姫。そして選手の関係者であられるフェイト・T・ハラオンさんに来てもらっています。』

『シンヤさん。がんばってくださいね。』

『ふむ、シンヤの姉。実力を見てみたいものだ。』

『二人とも無茶はしないでね。』

『では、よい、スタート』

第三十二話 帰ろう！帰りたくない。（後書き）

次回は真夜vsなのはの戦いが始まります。其の次くらいには最終話です。それから番外編の真夜の過去とドラマCDとなります。まだまだDOG DAYSは終わりません。

第三十三話 お姉ちゃんと対決（前書き）

今回は真夜VSなのはです。次回で本編は最終回となります。

第三十三話 お姉ちゃんと対決

お互い譲れない事のため、俺はお姉ちゃんと戦うことに……………俺は試合スタートの合図と共に双剣を取り出し、接近した。

「相変わらず接近戦が好きだね。やっぱりお兄ちゃんとお姉ちゃんの影響？」

「そんな所……………ハア！！」

思いつきり剣を振りかぶるが、お姉ちゃんにはその攻撃は通らず、障壁を張られた。

「でも、真夜のその攻撃もこうして止めちゃえば……………」

突然俺の体にピンク色の鎖が巻き付いた。俺は体の自由を奪われ、身動きが取れなかった。

「くっ、」

「こうやって相手の動きを封じて、そして……………全力で撃つ！！」

なのはお姉ちゃんはレイジングハートの先端に魔力をため込み、巨大な砲撃を撃ちこんで来た。俺は咄嗟にビオレの守護の力を使い、お姉ちゃんの砲撃を白い障壁で防いだ

「凄いね。それが真夜がこの世界で手に入れた力なんだね」

「俺を昔の俺だと思っていると、痛い目に合うよ。お姉ちゃん」

俺は双剣を構えた。なのはお姉ちゃんは後ろへ下がり俺との距離を取った。

「遠くから撃って、俺を接近させないつもりだな。だけど……………」

俺は双剣を一本の弓矢に形を変え、フロニヤ力を溜め込んだ。

「弓矢か。遠距離戦での戦い方もすっかり学んだんだね。だけど……………」

俺がお姉ちゃんに矢を放とうとした瞬間、突然後ろから攻撃を受けた。振り向くとそこにはピンク色の弾がいくつも浮かんでいた。

「アクセルシュート！？いつのまに……………」

「試合が始まった瞬間だよ。真夜が接近してくると同時に魔力弾を空の上に待機させといたの。」

「だけど、俺にはビオレの守護の力が……………」

「悪いけど、もう遅いよ。スターライトブレイカー！！」

俺が話している隙を狙って、なのはお姉ちゃんは収束砲を溜め込んでいた。お姉ちゃんのおれって、確か……………」

「……………障壁貫通だっけ？」

「正解。」

俺は成すすべなくお姉ちゃんの攻撃を喰らい、意識を失いそうになつていただけ……………

「甘いよ。お姉ちゃん。既に矢は放たれてる」

「えっ？」

俺が放とうとした矢は、時間をかけてお姉ちゃんがレイジングハートを握っている左手を狙い、お姉ちゃんはレイジングハートを落とした。

「勝利条件は相手をギブアップさせるか相手の武器を奪う。ちなみにもうレイジングハートは俺のビオレの障壁に閉じ込めたから……………拾えないよね」

「……………まさかこんな方法で負けるなんてね」

お姉ちゃんに無事なんとか勝利できたけど、正直ギリギリの戦いで俺はかなり疲労して、城の庭の方で休んでいた。お姉ちゃんはミルと姫に今回の戦いの機会作ってくれたことに関して、お礼を言いに行っていた。

「真夜。」

「シンヤさん。」

フツとリコとフェイトさんが声をかけてきた。そういえばこの二人声が似てる気がする。

「フェイトさん。リコ。どうしたの？」

「シンヤさん。実はこのフェイトさんにシンヤさんと一緒に作った帰還用の装置が完成しそうなのであります。」

「本当か？リコ」

「はいであります」

「この子が知恵を貸して欲しいって言われてね。色々と協力したの。私となのはもその装置が完成するまでこの世界にいるから、一緒に帰ろう」

「だったら、あの試合はやらなくてよかったような気が……でも、まあいいか」

俺は空を見上げて、そういうのであった。もう少ししたらこの世界と……リコとしばらくの間お別れか……

第三十三話 お姉ちゃんと対決（後書き）

短めですみません。次回で最終回です。最終回が終わったら番外編で真夜の過去をやり、ドラマCDの話をやります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6379s/>

DOG Days もう一人の来訪者

2011年11月22日02時56分発行